



彩の国さいたま

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第226集

日高市

宮ノ後遺跡

県道飯能寄居線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



調査範囲全景



第3号竪穴住居跡出土須恵器

序

埼玉県では、21世紀の豊かな彩の国をめざして、特色ある地域が連携し、調和と均衡のとれた県土を構築するため、体系的な道路交通網の構築に努めています。すでに各地で高速道路網、地域高規格道路、幹線道路網が整い、県内1時間道路網構想も達成されつつあります。

地方主要道能寄居線建設事業も、県西部商業地域の急速な発展にともなう交通量の増大と、地域交通網の整備に対応するために計画されたものです。

日高市内の飯能寄居線建設予定地内には、埋蔵文化財が所在することが知られていました。その取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、これらの遺跡について、埼玉県教育局长生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県土木部道路建設課の委託を受けて、発掘調査を実施いたしました。

日高市は、高麗丘陵・高麗川が彩づくる景勝地を控え、高麗神社や聖天院など古社寺が多く、中世の鎌倉街道上道、近世の日光街道脇往還が通る交通の要衝としても知られてきました。また、国指定史跡である高麗村石器時代住居跡をはじめ、多数の埋蔵文化財が所在する地でもあります。

本書で報告いたします宮ノ後遺跡は、隣接する稲荷・常木久保遺跡とあわせ、高麗郡建部直後の奈良時代から平安時代にかけて栄えた屈指の集落跡であります。調査の結果、奈良時代を中心にした多数の資料を発見しました。度重なる建替えを経て大型化する住居跡の姿や青銅製の帯金具が出土したことから、女影壁寺建立や高麗郡建部当時の様子を物語る貴重な事例を得ることができました。

これらの成果をまとめた本書を、埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局长生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました埼玉県土木部道路建設課、日高市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成10年6月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県日高市に所在する宮ノ後遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

宮ノ後遺跡 (MYNU)
日高市大字猿田字橋本128番地7他
平成7年4月18日付け教文第2-8号
3. 発掘調査は、県道飯能寄居線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、黒坂禎二、橋本充史(現 越谷市教育委員会)が担当し、平成7年4月1日から平成7年5月31日まで実施した。整理
- 報告書作成事業は岩田明広が担当し、平成10年4月1日から平成10年6月30日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は大宮測技㈱に、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に、それぞれ委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、黒坂、橋本が行い、遺物の写真撮影は岩田が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は、岩田が行った。本書の執筆は1-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他は岩田が行った。
8. 本書の編集は、岩田があたった。
9. 本書にかかる資料は平成10年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、日高市教育委員会、および中平 薫、渡辺 一の諸氏からは御教示・御協力を賜った。記して謝意を表するものである。

凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の枕番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
S J…住居跡 S K…土壇
S B…掘立柱建物跡
4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。
遺構全測図 1/160
住居跡・掘立柱建物跡 1/60
土壇 1/60 断面図 1/60
5. 挿図中のスクリーントーンは、住居跡平面図においては焼土分布範囲および燃焼にともなう焼土化範囲を、遺構断面図における斜線は地山を示す。
6. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものはスケールで示した。
土器 1/4 土製品・金属製品 1/2
石製品・石器 1/2
7. 遺物観察表の計測値は、()内は推定値、単位はcmおよびgである。

8. 発掘調査における土壌および遺物観察表における遺物の色調は、新版標準土色帳（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準じた。
9. 遺物観察表の胎土は、含有砕屑物のうち礫と砂粒鉱物を肉眼観察し、下のように表記した。
A…透明・半透明鉱物
B…白雲母 C…黒雲母
D…輝石・角閃石 E…白色針状物質
F…石英質礫 G…チャート
H…酸化鉄結核
10. 遺物観察表の焼成は次のとおりである。
A…良 B…不良
11. 遺物観察表の備考に記した土器の製作技法等に関する略号は、次のとおりである。

部位

全…全面 周…周辺 端…体部下端

調整

削…回転ヘラケズリ

磨…回転ヘラミガキ

その他

箋記…箋記号

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 竪穴住居跡	12
1. 調査に至るまでの経過	1	(2) 掘立柱建物跡	33
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. その他	35
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	(1) 土壌	35
II 遺跡の立地と環境	4	(2) その他の出土遺物	35
III 遺跡の概要	8	V 調査の成果	38
IV 遺構と遺物	12	引用・参考文献	45
1. 奈良・平安時代	12		

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	4	第14図	第3号竪穴住居跡出土遺物(1)	23
第2図	周辺の遺跡	6	第15図	第3号竪穴住居跡出土遺物(2)	24
第3図	稲荷・常木久保・宮ノ後遺跡遺構分布図	9	第16図	第3号竪穴住居跡出土遺物(3)	25
第4図	調査範囲全測図	10	第17図	第3号竪穴住居跡出土遺物(4)	26
第5図	第1号竪穴住居跡および掘り方	13	第18図	第4号竪穴住居跡および出土遺物	29
第6図	第1号竪穴住居跡遺物出土状況	14	第19図	第5号竪穴住居跡および出土遺物	31
第7図	第1号竪穴住居跡出土遺物	15	第20図	第6号竪穴住居跡および出土遺物	32
第8図	第2号竪穴住居跡	16	第21図	第1号掘立柱建物跡および出土遺物	33
第9図	第2号竪穴住居跡掘り方および出土遺物	17	第22図	第2号掘立柱建物跡	34
第10図	第3号竪穴住居跡(1)	19	第23図	土壌	35
第11図	第3号竪穴住居跡(2)	20	第24図	旧石器時代の確認範囲	36
第12図	第3号竪穴住居跡掘り方	21	第25図	その他の出土遺物	37
第13図	第3号竪穴住居跡遺物出土状況	22	第26図	須恵器杯の主成分スコア散布図	43

図 版 目 次

図版1	調査範囲全景	第7図4
	住居跡群	第14図1
図版2	第1号竪穴住居跡	第14図3
	第1号竪穴住居跡掘り方	第14図4
図版3	第2号竪穴住居跡	図版9 第14図5
	第2号竪穴住居跡掘り方	第14図6
図版4	第3号竪穴住居跡	第14図7
	第3号竪穴住居跡遺物出土状況	第14図8
図版5	第3号竪穴住居跡遺物出土状況	第14図11
	第3号竪穴住居跡帯金具出土状況	第14図12
図版6	第4号竪穴住居跡	第14図15
	第5号竪穴住居跡	第15図21
図版7	第6号竪穴住居跡	図版10 第14図23
	第1号掘立柱建物跡	第14図24
図版8	第1号土壌	第14図25
	第2号土壌	第14図26
	第3号土壌	第15図27
	第7図3	第15図33

第16図69
第16図71
図版11 第14図 4
第14図 6
第15図27
第15図58
第15図60
第15図61
第15図62
第15図59
図版12 口縁仕上痕と体部下端の胎土継ぎ目

体部下端の胎土継ぎ目
口縁仕上痕と挽き上げ痕
ロクロ稜線と交わるロクロナデ痕
仕上ナデとみられる平滑な面
内面のロクロ稜線を消す仕上ナデ
図版13 第16図84・85
第16図87
図版14 第20図 8
出土金属製品類(第7・17図)
図版15 第17図98
第24図 3・4

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、体系的な道路網整備を行っているところである。特に、県内地域間の連携を高めるために、県道の強化が図られている。これらの構想のもと、県道飯能寄居線建設事業が計画された。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種開発事業に対応するため、開発部局と事前協議を行い、文化財保護と開発事業との調整を進めているところである。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、埼玉県土木部道路建設課長より、平成7年2月7日付け道建第406-1号で、埋蔵文化財の所在およびその取り扱いについての照会があった。これに対し、文化財保護課では、平成7年3月10日付け教文第1114号で、次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
宮ノ後遺跡 (No29-104)	集落跡	平安時代	日高市大字飯田内

2 取り扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地について、現状保存することが望ましいが、事業計画上、やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条3の規定に基づき文化庁長官あての発掘(工事)通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

発掘調査については、調査実施期間である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、道路建設課、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等を中心に協議が行われ、その結果、平成7年4月1日から同年5月31日までの予定で発掘調査が実施されることで協議が整った。

発掘調査に先立って、事業者側から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは同法第57条1項の規定に基づく発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

なお、調査届に対する指示通知の番号は、次のとおりである。

平成7年4月18日付け 教文第2-8号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

宮ノ後遺跡の調査は、平成7年4月1日から平成7年5月31日まで行った。調査面積は約2,000㎡である。

宮ノ後遺跡における発掘調査の実施経過は以下のとおりである。

平成7年4月初旬、文化財保護課、道路建設課担当者と調査工程の打ち合わせを行った。

4月上旬、発掘調査現場事務所を設置し、重機による表土掘削を行った。4月17日、基準点測定を行った。また、補助員を導入し、調査を開始した。調査は、はじめに確認を行い、竪穴住居跡から着手した。4月下旬、竪穴住居跡の測量・写真撮影を実施した。

5月中旬～下旬、竪穴住居跡掘り方の調査、土壌の

測量・写真撮影を行った。5月末をもって宮ノ後遺跡に関する発掘調査をすべて終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成10年4月1日から平成10年6月30日まで実施した。

4月当初から、遺物の接合・復元・実測を行った。

5月、遺物の実測と平行して、遺構図面の整理、遺物写真撮影を行った。

6月上旬、遺構・遺物図面のトレース、および遺構図・遺物図の版組を行い、平行して割付、原稿執筆を行った。8月上旬、校正を行い、8月末に本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成7年度）

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	吉 川 國 男
常務理事兼管理部長	新 井 秀 直
理 事 兼 調 査 部 長	小 川 良 祐

管理 部

庶 務 課 長	及 川 孝 之
主 査	市 川 有 三
主 任	長 滝 美 智 子
主 事	菊 池 久
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二

調 査 部

調 査 部 副 部 長	高 橋 一 夫
調 査 第 二 課 長	大 和 修
主 任 調 査 員	黒 坂 禎 二
調 査 員	橋 本 充 史

(2) 整理・報告書刊行（平成10年度）

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠 一 郎
常務理事兼管理部長	鈴 木 進

管 理 部

庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	長 滝 美 智 子
主 任	腰 塚 雄 二
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久

資 料 部

資 料 部 長	増 田 逸 朗
主幹兼資料部副部長	小久保 徹
資料整理第二課長	市 川 修
主 任 調 査 員	岩 田 明 広

II 遺跡の立地と環境

埼玉県の地形は、西部を占める上武・奥秩父・外秩父の各山地、これに沿って県土の中心部を南北に連なる丘陵・台地、利根川・中川によって形成された北部から東部に広がる低地帯の3つに分けられる。

宮ノ後遺跡が所在する日高市は、山地と丘陵地の境界付近にあたる。西部には外秩父山地が広がり、ここから北に毛呂山、南に高麗の2つの丘陵が張り出している。東部は入間川・越辺川・高麗川によって形成された新第三系に属する入間台地のうち、高麗川右岸の坂戸台地、入間川左岸に広がる飯能台地を主な基盤としている。

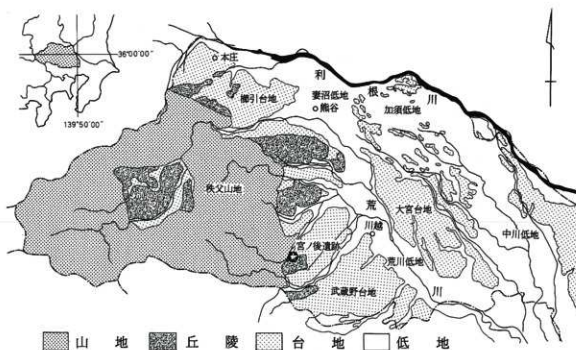
坂戸台地は、高麗川によって形成された高麗本郷付近を扇頂とする古い扇状地性の台地で、侵食が進み平坦地が多い。南を高麗丘陵と小畦川に画されている。飯能台地は、入間川の古い扇状地として形成されたもので、3つの段丘面からなっている。とくに高萩付近の位置する上位面は小支谷が入り組み、起伏ある地形

をなしている。

宮ノ後遺跡は、南が小畦川を隔てた高麗丘陵、西が外秩父山地縁辺を北流する高麗川、東が北東流する小畦川に、それぞれ画された坂戸台地南端部に立地している。小畦川を境に坂戸台地と飯能台地が接するこの地域には、多数の遺跡が分布している。

旧石器時代の遺跡は、圏央道建設関連の調査によって、近年、主に南小畦川流域の飯能台地上に多く発見され、資料が蓄積されており、砂川遺跡との位置関係からも注目されている。日高市下向山遺跡は砂川期から尖頭器文化までの石器群を出土した(西井・金子・岡本1993)。西久保遺跡では武蔵野台地IV層下部から砂川期、および尖頭器文化の石器群が出土しており、整ったナイフ形石器が注目されている(西井・栗岡1995)。細石器文化の遺跡では、鶴ヶ島市横田遺跡(田中・黒坂・大谷1995)・柳戸・新山遺跡(西井・井上・金子1995)、宮地遺跡(城近1972)が調査されている。

第1図 埼玉県の地形



このほか、日高市向山遺跡では、砂川期から細石器文化に至る石器群が検出されている(田中・黒坂1995)。

縄文時代の歴史的環境については、前刊書(田中・黒坂1995、渡辺1998など)に詳しく記されているので、本書では簡単にまとめておこう。

草創期の遺跡は、現在のところ日高市向山遺跡、隆起線文土器群を出土した鶴ヶ島市柳戸遺跡(西井・井上・金子1995)のほか、高麗川上流の飯能市小岩井渡場遺跡(安岡1977)が認められるにすぎない。早期になると小畦川流域を中心とした遺跡分布が認められる。日高市向山遺跡、長山甲遺跡では押型文土器が、日高市西久保遺跡では条痕文期の炉穴が、二反田遺跡では前期初頭頃とされる縄文と条痕文を併用する時期の住居跡が検出されている。同時期の遺跡には、炉穴を検出した日高市向原遺跡(田中・黒坂1995)などがある。前期の遺跡は現在のところ判然とせず、上野ヶ谷戸遺跡など少数が認められる程度である。今後の事例増加を待ちたい。中期には、小畦川水系の右地上面を中心に遺跡数が飛躍的に増加する。日高市宿東遺跡(渡辺1998ほか)、二反田遺跡、稲荷遺跡、上原遺跡、向原遺跡、丸山遺跡などがある。後期には、高麗川・入間川など大河川の河岸段丘上に分布が認められ、日高市東原遺跡(中平1991)、向原遺跡などがある。晩期の遺跡はさらに少数で、東原遺跡が知られる程度である。

弥生時代の状況も明確ではない。中期の遺跡では、入間川流域の拠点的な集落である川越市霞ヶ関遺跡、小畦川流域の川越市登戸遺跡、ほかに坂戸市附島遺跡が確認されている程度である。後期では、霞ヶ関遺跡が継続するほか、小畦川流域では川越市鶴ヶ丘遺跡、高麗川流域の坂戸市花影遺跡がある。二反田遺跡・拾石遺跡では、磨製石鏃が発見されており、今後の調査が期待される。

古墳時代前期の遺跡も少数に限られる。川越市霞ヶ関遺跡、坂戸市稲荷前遺跡などが認められている程度で、周辺の状況は明確ではない。中期の遺跡は、小畦川流域に集落内祭祀で注目を集めた川越市御伊勢原遺跡、女塚遺跡が一つの分布域を形成しているのに対し

て、入間台地内部には日高市和田遺跡が知られる程度である。後期には、坂戸市稲荷前遺跡(富田1992)、桑原遺跡(村田1992)、塚の越遺跡(辻岡1991)、川越市霞ヶ関遺跡などの大集落が形成されるが、いずれも前代から継続する集落であり、宮ノ後遺跡周辺には同時期の集落は確認できていない。

古墳も大半が後期古墳である。小畦川流域に築かれた6世紀初頭の川越市下小坂3号墳などの大型円墳をはじめ、6世紀中頃以後、入間台地北部には坂戸市塚原1・2号墳、雷電塚古墳、入間川流域の川越市牛塚古墳、南大塚4号墳などの小型前方後円墳が築造されている。これらの地域には横穴式石室を主体とする群集墳も多く認められる。

奈良時代以後、小畦川流域を中心に遺跡数が爆発的に増加する。日高市内の遺跡に限っても、宮ノ後遺跡の西側に隣接する神明遺跡をはじめ、若宮遺跡、新宿遺跡、稲荷遺跡、常木久保遺跡、二反田遺跡、宮久保遺跡、前田遺跡などが把握されている。

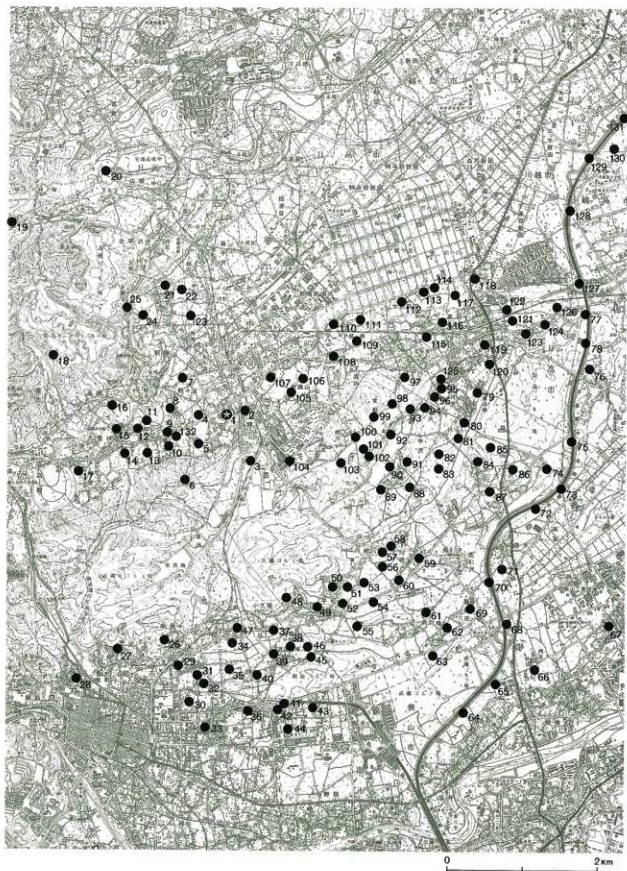
霊龜二(716)年には、駿河・甲斐・相模など七か国の高麗人を武蔵国に移し高麗郡をおいたとされるが、日高市上猿ヶ谷戸遺跡・川越市光山遺跡(西井・井上・金子1995)における集落や、高麗郡寺と推定される女影庵寺(若宮遺跡内)の状況(日高市教育委員会1997)とともに、高麗建郡に関連した動向と考えられる。日高市史では、集落や寺院跡が出現する当該時期の問題は特に重視されている。

このほか、8世紀第II四半期までに大寺廃寺(中平1983・1984ほか)が、第III四半期には高岡廃寺が建立されたと考えられている。

平安時代には、宮ノ後遺跡がある坂戸台地全体に遺跡分布が認められるようになる。若宮遺跡、稲荷遺跡、堀ノ内遺跡、常木久保遺跡などが代表例である。

中世以後は調査例が少なく、状況は判然としない。日高市内には鎌倉街道上道の推定地があり、下向山遺跡で調査が行われているが、明確な道路跡は検出できなかった。なお、二反田遺跡では鋳造関連遺物が出土しており、近世の柏原銅師との関係が推測できる。

第2図 周辺の遺跡



1	宮ノ後・常木久保・稲荷遺跡	40	郷路遺跡	79	北中沢遺跡	118	新宿遺跡
2	北鹿山遺跡	41	浅間屋遺跡	80	東方遺跡	119	寺脇遺跡
3	稲荷沢遺跡	42	浅間遺跡	81	岡場遺跡	120	谷津前遺跡
4	神明遺跡	43	丙新田遺跡	82	向原遺跡	121	宿東遺跡
5	竹ノ内遺跡	44	新光遺跡	83	柳久保遺跡	122	上宿遺跡
6	東谷遺跡	45	栗木田遺跡	84	宿方遺跡	123	宮ノ前遺跡
7	稲荷道遺跡	46	Na103遺跡	85	向谷遺跡	124	宮ノ後遺跡
8	小竹遺跡	47	Na148遺跡	86	新屋敷遺跡	125	女影原古戰場遺跡
9	中里遺跡	48	猪野遺跡	87	下宿遺跡	126	西不動遺跡
10	貝戸遺跡	49	Na120遺跡	88	森ノ腰遺跡	127	上猿ヶ谷・光山遺跡
11	悪津遺跡	50	中原遺跡	89	山下遺跡	128	新山遺跡
12	東原遺跡	51	小原遺跡	90	古原遺跡	129	向山遺跡
13	井尻遺跡	52	梶ヶ谷遺跡	91	西佛遺跡	130	横田遺跡
14	栗原前遺跡	53	左別当遺跡	92	上ノ糸遺跡	131	柳戸遺跡
15	馬場遺跡	54	ヤタリ遺跡	93	昔田遺跡	132	前田遺跡
16	西久遺跡	55	張摩久保遺跡	94	金子ヶ谷遺跡		
17	高麗小学校庭内遺跡	56	Na101遺跡	95	諏訪山遺跡		
18	高岡寺遺跡	57	Na90遺跡	96	瀬戸原遺跡		
19	宿谷遺跡	58	西原遺跡	97	若宮遺跡		
20	大寺遺跡	59	下川崎向原遺跡	98	上鎌遺跡		
21	上野ヶ野遺跡	60	芋久保遺跡	99	姥ヶ原遺跡		
22	助殿林遺跡	61	堂ノ根遺跡	100	姥田遺跡		
23	原ノ上遺跡	62	向原A遺跡	101	姥田前遺跡		
24	滝ノ前遺跡	63	向原遺跡	102	北竹ノ内遺跡		
25	滝遺跡	64	宮地遺跡	103	千丈ヶ谷遺跡		
26	加治遺跡	65	金井上遺跡	104	愛宕山遺跡		
27	中山家範館遺跡	66	上広瀬上ノ原遺跡	105	後耕地遺跡		
28	飯能上野遺跡	67	今宿遺跡	106	篠ノ宮遺跡		
29	泉ヶ城遺跡	68	西久保遺跡	107	明婦遺跡		
30	台遺跡	69	芦刈場遺跡	108	白糠遺跡		
31	堂前遺跡	70	向原遺跡	109	大木下遺跡		
32	並久保遺跡	71	上原遺跡	110	稲荷遺跡		
33	仲宿遺跡	72	向原遺跡	111	大黒ヶ谷戸遺跡		
34	栗原遺跡	73	下向原遺跡	112	道光林遺跡		
35	屋淵遺跡	74	宮久保遺跡	113	中王神遺跡		
36	山ノ内遺跡	75	二反田遺跡	114	王神遺跡		
37	株木遺跡	76	向山遺跡	115	古道遺跡		
38	甲新田遺跡	77	長山甲遺跡	116	堰ノ内遺跡		
39	Na102遺跡	78	西ノ久保遺跡	117	拾石遺跡		

III 遺跡の概要

過去の調査成果の概要

今回調査を行った宮ノ後遺跡は、坂戸台地に展開する奈良・平安時代を中心とした4つの集落跡からなる遺跡群の南東部にあたる。遺跡群は微地形の相違等によって区分されており、もっとも北に稲荷遺跡、埋没谷を挟んで常木久保遺跡、西側に隣接する神明遺跡、常木久保遺跡の南、果道川越日高線を挟んで宮ノ後遺跡が分布している。宮ノ後遺跡と常木久保遺跡を区分する積極的な理由は認められず、本来同一集落として扱われる一連の遺跡である。神明遺跡についても、遺跡の位置および内容からみて、同一集落を構成する可能性は少ない。

遺跡群の南側には高麗丘陵に点在する湧水点を源とする四反田堀と支流をなす小河川が流れており、さらに南方には小畦川が形成した扇状地性の沖積地が展開している。宮ノ後遺跡は、四反田堀および小畦川に向かう斜面地に位置する集落南縁部分である。遺跡の標高は、北部の稲荷遺跡で84m程度、南部の宮ノ後遺跡で82m程度である。

宮ノ後遺跡を含む遺跡群は、いずれも過去に調査が行われている。ここで、各遺跡毎に調査成果の概要をまとめておこう。

稲荷遺跡・常木久保遺跡では、1984(昭和59)年度から川越都市計画事業高麗川駅西口土地区画整理事業にともなう調査が日高市(当時日高町)教育委員会によって行われた。1996(平成8)年度までに、奈良・平安時代の竪穴住居跡50軒、井戸跡2基、他に溝跡11条、土壇77基、ピット111基が検出されている。日高市による発掘調査は平成9年度以後も継続中で、本書の刊行以後も成果があらにされる予定である。

神明遺跡では、1988(昭和63)年度に、川越都市計画事業高麗川駅西口土地区画整理事業にともなう調査が日高市(当時日高町)教育委員会によって行われ、奈良時代の竪穴住居跡1軒が検出された。

集落構成の変遷については、『日高市史 原始・古代

資料編』中に、「稲荷・常木久保・宮ノ後遺跡」について8期に区分して詳細な分析が試みられており(中平1997)、すでに今回報告文の成果も織り込まれている。概要を記せば、8世紀前半から中頃にかけて、四反田堀に近い台地上に出現した集落が、9世紀には四反田堀から離れた台地上面および埋没谷を隔てた台地斜面部に生活域を広げ、10世紀以後衰退するとされている。神明遺跡の状況も、この動向の中に含めてよいだろう。

出土遺物は須恵器が中心で、8世紀代に主要な須恵器供給地であった南比企窯跡産のものから、9世紀代には東金子窯跡産の製品に変遷するとされ、入間郡域全体における動態と符合する。

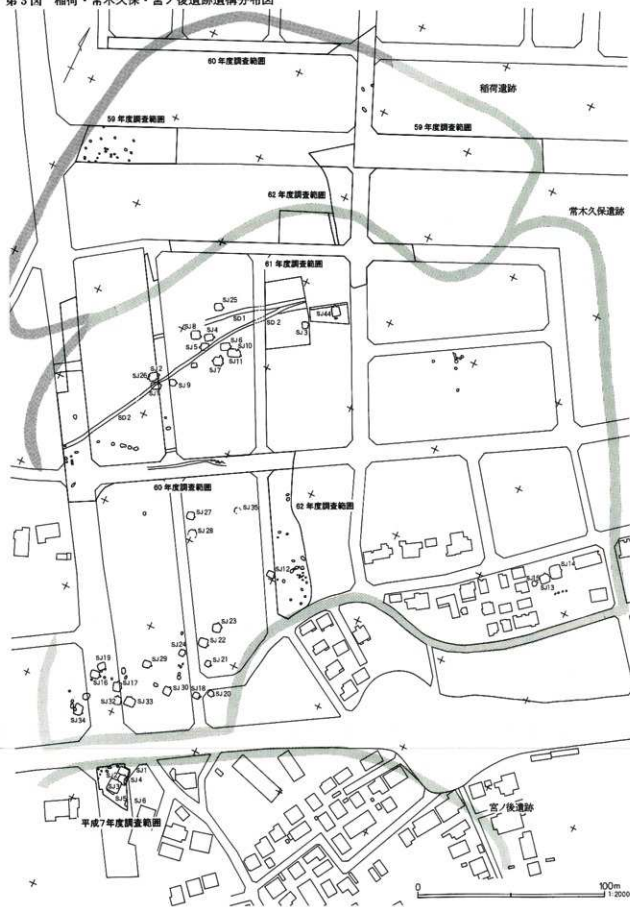
宮ノ後遺跡の概要

本書で報告する宮ノ後遺跡の調査は、日高市土地区画整理事業地に隣接するが、果道建設地部分となったため、当事業団が平成7年度に実施したものである。調査対象地は奈良・平安時代の集落を主体とする遺跡群の南辺境界部分で、遺構分布は調査対象地の北部に限られていた。地勢は遺跡群の南約300m程度の距離を北東流する四反田堀に向かって南傾斜をなしており、稲荷遺跡南部の埋没谷への緩傾斜に比べて、8%程度とややきつい傾斜となっている。およそ第4図の標高82.9mの等高線付近から下方に向かって、多量の暗色シルトが堆積しており、地山を形成しているローム層の傾斜は、さらに急であると予想される。

傾斜地下方についても、6箇所のグリッド掘りによる調査をおこなったが、遺構・遺物とも検出することはできなかった。

今回検出した遺構は、奈良時代の竪穴住居跡6軒、独立柱建物跡2棟、中・近世の土壇3基で、他にローム層中の調査によって旧石器時代の黒曜石製細石刃1点および剥片、縄文時代中期の土器片3片を得ることができた。

第3図 稲荷・常木久保・宮ノ後遺跡遺構分布図



竪穴住居跡はすべて奈良時代後半のもので、はげしく重複しており、第2・3号住居跡では建替え・拡張が行われるなど、重複を含めるときわめて短期間のうちに同一場所に住居跡が再建される状況が把握できた。

第3号住居跡は、拡張の末、東西6.69m、南北7.06mと集落中では大型の住居跡になっており、同規模の常木久保遺跡第14号住居跡とともに、同時期の中心的な遺構と考えられる。

また、当該時期の掘立柱建物跡は、遺跡群全体でも検出できておらず、宮ノ後遺跡を含む台地南縁辺部が、集落全体のうちでも消長全般にわたって重要な位置を占めていたことがうかがえる。

出土遺物は、第3号住居跡から多くの須恵器杯を得ることができた。南比企窯跡群産の奈良時代後半を中心としたものが主体を占める。底部にヘラ記号をもつものや、「部」、「工下」などの黒書をもつものが認められた。また、第3号住居跡からは、青銅製の帯金具巡方1点を得た。

宮ノ後遺跡を含む一連の遺跡群からなる集落は、高麗建郡に対応する時期に成立し、10世紀代まで、坂戸台地南辺に安定して生活の場を確保していたことが明らかになった。出土遺物の内容、竪穴住居跡・掘立柱建物跡が正方位を基軸としていることなど、律令的色彩をみることができる。

IV 遺構と遺物

1. 奈良・平安時代

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡(第5～7図)

B2・3、C2・3グリッドで検出した。平面形は東西に長い長方形であった。規模は長辺5.42m、短辺4.28m、深さは最も深い部分で0.24m、主軸方位はN-92°-Eであった。竪穴部上部は上層からの擾乱によって、ほとんどが失われており、検出できたのは、壁下方部分と床面である。

南側壁溝部分が、第2号竪穴住居跡カマドおよび壁溝と重複関係にあり、土層断面と遺構の破壊状況の確認から、第2号竪穴住居跡が第1号竪穴住居跡に先行すると判断できた。

覆土は黒褐色あるいは暗褐色土主体で、少量の焼土と地山ローム層に起源をもつローム粒を含んでいた。

壁面は、上部を削平されていたため壁溝底面付近が残存していたのみで、傾斜していた。壁溝は、南側壁面で、下層の第2号竪穴住居跡を確認するための削平によって一部を失ったが、断面調査の結果では全周していたものと考えられる。幅は20cm前後で、深さは床面上面から5cm程度であった。

カマドは東側壁面に設置されていた。燃焼部には、燃焼灰(5層)の上層に、多量の硬い焼土からなる褐

色の層が堆積していた。燃焼部床面は、竪穴部床面より約30cm前後の深さに掘り窪められていた。煙道は、燃焼部床面から一旦急傾斜に立ち上がり、緩やかとなった後、確認面付近で再び急傾斜となっていた。上部は失われており、詳細は不明である。袖部は、基礎に地山ローム層の掘り残しを若干の盛り上がりを作っており、上部には白色粘土を積み上げていた。

柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

また、床面の硬化状況などについては、明確に把握できなかった。

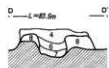
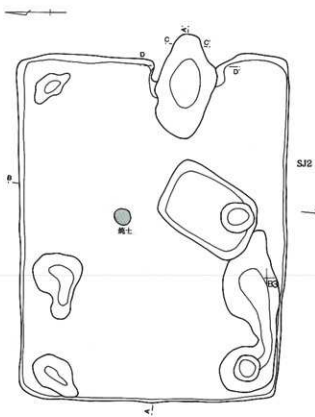
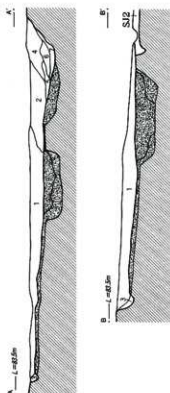
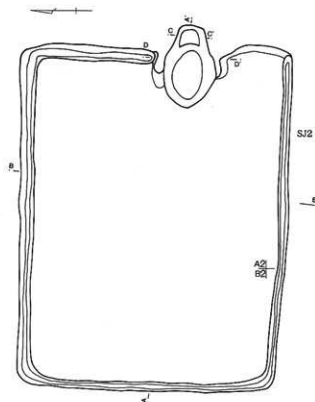
竪穴部の掘り方は、隅を深く掘り下げていた以外、特に確認できなかった。なお、南東隅については、第2号竪穴住居跡との重複のため明らかにすることができなかった。

中央南側床下には、長辺160cm、短辺108cm程度の整った長方形の掘り込みが検出された。方位がまったく異なるが、覆土にはロームブロック・ローム粒の多く混じった暗褐色土の貼土層類似の土壌が底面付近に認められ、床下土壌の可能性も完全に否定することはできない。また、床下住居跡中央付近には、径26cm程度の小円形の範囲に、焼土の分布が認められた。

第1号竪穴住居跡出土遺物観察表(第7図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	(18.2)			AEFGH	A	灰白	10	外; 削・仕上ナテ つまみ基部径2.9cm 南比企
2	杯	(12.3)	3.7	(7.3)	AFG	A	灰	30	底; 糸周端前後磨 外; 仕上ナテ 口縁仕上痕
3	杯	12.6	3.5	8.3	AEFGH	A	灰オリーブ	80	底; 糸周削 内外; 仕上ナテ 口縁仕上痕 底磨記
4	杯	13.2	3.9	7.3	EFGH	A	にぶい橙	100	底; 糸周削 内外; 仕上ナテ 南比企
5	杯	(15.2)			AEFGH	A	灰白	15	口縁仕上痕 重焼痕
6	杯	(11.8)			AFG	A	灰白	10	外面に取り上げ時の指跡 東金子
7	杯			(7.0)	FHG	A	にぶい黄橙	50	底; 全削 外; 仕上ナテ 南比企
8	杯			(9.3)	AEFG	A	灰白	25	底; 全削 内外; 仕上ナテ 南比企
9	杯			7.0	AEFG	A	灰	40	底; 糸周削 内外; 仕上ナテ 南比企
10	杯			8.7	AFG	A	灰オリーブ	100	底; 糸周磨
11	壺	(21.5)			AFGH	A	灰	5	内外; ヘラナテ
12	台付 甕			(11.0)	ABCDF	A	にぶい褐	20	
13	巖 石	長13.3cm、幅5.6cm、厚さ5.3cm、							全体に被熱
14	刀 子	長8.0cm、幅1.4cm、厚さ0.45cm、							
15	土 錘	長5.0cm、径1.4cm			AG	A	浅黄橙	100	孔径0.4cm、8.90g

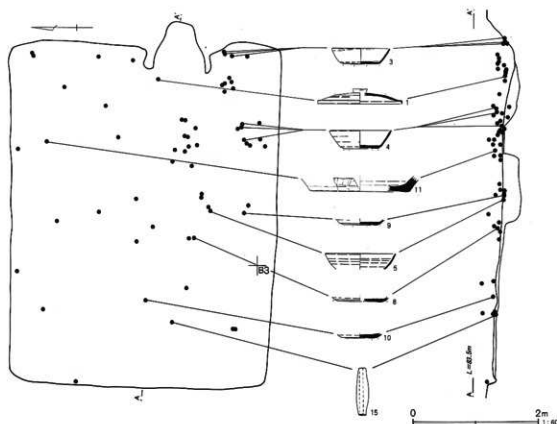
第5図 第1号竪穴住居跡および掘り方



- 1 黒色土 ロームブロック多、ローム粒多、炭化物少
- 2 黒色土 3層に似る
- 3 黒褐色土 ロームブロック主体、壁崩落層
- 4 黒色土 粘土・焼土粒多
- 5 黒色土 炭化物主体、焼土粒少、カマド灰層
- 6 焼土 カマド天井部 下部ほど焼練まりが強い
- 7 褐色土 カマド火床面
- 8 灰白色土 カマド袖部 白色粘土
- 9 暗褐色土 黏床層 ロームブロック・ローム粒多量
- 10 暗褐色土 黏床層 シルトブロック主体 ロームブロック

0 2m
1:60

第6図 第1号竪穴住居跡遺物出土状況



出土遺物は、カマドに向かって右側と燃焼部前面を中心に少量出土した。南比企窯跡群産を中心とした須恵器杯・杯蓋・瓶類・甕等、土師器甕・台付甕、他に土錘1点、刀子1点、敲石1点等が出土した。

出土した土器は多くが細片であったが、須恵器杯2点が復元の結果、ほぼ完形となるなど、少数ながら図示することができた。

図示した出土遺物のうち、3はカマド右側の壁上から落下したと推測できるもので、本住居跡に遺棄された可能性がある。他の遺物は、いずれも床面から5cm前後の土壌堆積後に流入もしくは廃棄されたものと考えられ、生活段階から本住居跡にともなうと確定できるものではなかった。

第2号竪穴住居跡 (第8・9図)

B2・3グリッドで検出した。平面形はほぼ方形であった。規模は南北4.78m、東西5.05m、深さ0.10m、主軸方位はほぼN-Sであった。竪穴部上部は上層か

らの攪乱によって、ほとんどが失われており、検出できたのは、床面付近に限られる。

カマドのある北側壁部分が第1号竪穴住居跡と、東側では第4号竪穴住居跡および第2号掘立柱建物跡と、また南側では第3号竪穴住居跡と、それぞれ重複関係にあり、土層断面と遺構の破壊状況の確認から、第2号竪穴住居跡が第1・3・4号竪穴住居跡、および第2号掘立柱建物跡に先行すると判断できた。

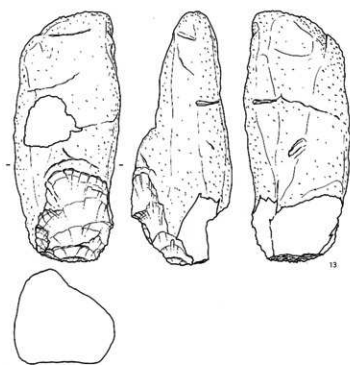
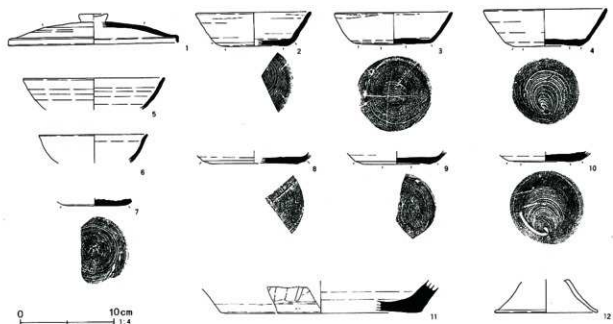
覆土は黒褐色あるいは暗褐色のシルト主体で、少量の焼土と地山ローム層に起源をもつローム粒を含んでいた。

壁面は、上部を削平されていたため壁溝底面付近が残っていたのみで、床面についても本来の上面をすべて検出できたと断定することはできない。

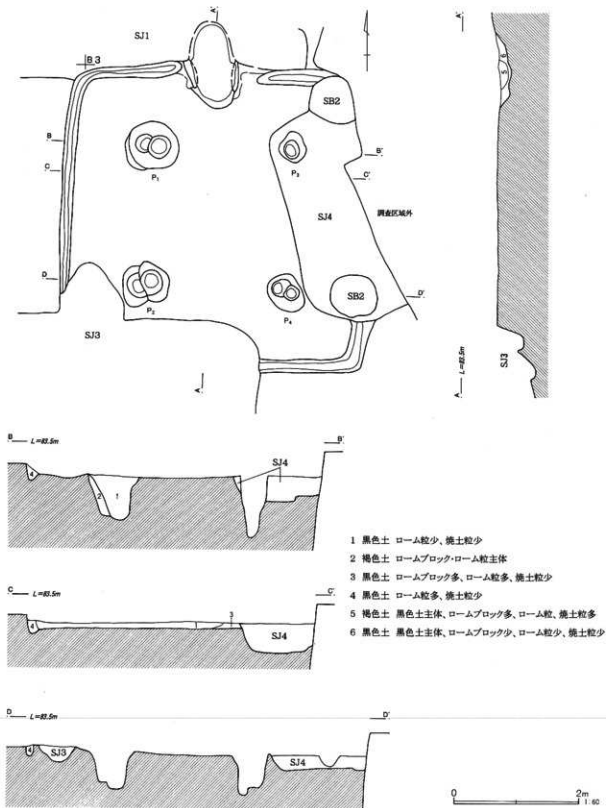
壁溝は、第3・4号竪穴住居跡との重複部分で破壊されていたが、それ以外の部分では全周していた。幅約10~20cm程度、深さ約10cm程度であった。

カマドは北側壁面に設置されていた。燃焼部には、

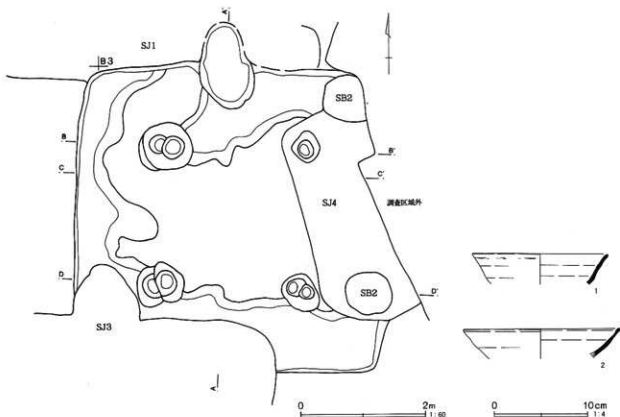
第7图 第1号竖穴住居跡出土遺物



第 8 図 第 2 号竪穴住居跡



第9図 第2号竪穴住居跡掘り方および出土遺物



第2号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(14.5)			AEFGH	A	灰黄	20	内外: 仕上ナデ 口縁仕上痕 南北企
2	杯	(16.6)			AEFGH	A	灰黄	5	内外: 仕上ナデ 南北企

第1号竪穴住居跡による擾乱のため、明確な灰層が認められなかった。焼部部の覆土は竪穴部覆土とはほぼ同様で、多量の焼土が混入していた。焼部部床面は、竪穴部床面より18cm前後の深さに掘り窪められていた。焼部部底面は煙道方向にすり鉢状に立ち上がるが、煙道の状況は第1号竪穴住居跡による破壊のため明らかにならなかった。袖部は検出できなかったが、床面に地山ローム層の掘り残り部分として痕跡を確認することができた。破線で示した袖部の形状は、痕跡の範囲である。

柱穴は4本で整った長方形に配置されていた。P3を除き、いずれも2穴が重複しており、柱は新旧ともに抜き取られていた。各柱穴における重複の新旧関係は、断面観察によれば、外側に新しくなる拡張とは異なり、柱穴の切り合いのないP3を中心に、柱間225cm

前後の布置を回転した状況が認められた。P3を抜き取らずに、上層の建替えを行ったと解釈するのが自然である。

各柱穴の深さは、P1の新が69cm、旧が62cm、P2の新が60cm、旧が47cm、P3が100cm、P4の新が52cm、旧が65cmであった。P3の柱穴の深さが特徴的である。

貯蔵穴は検出できなかった。

床面の硬化状況などについては、明確に把握できなかった。

竪穴部の掘り方は、第3・4号竪穴住居跡との重複部分について不明瞭であるが、周囲とカマド前面を深く掘り下げていた。柱穴によって囲まれる範囲には明確な掘り下げは認められなかった。

貼床材には、黒色土のブロックにロームブロックを混合した土壌が用いられていた。

出土遺物は、カマド燃焼部覆土内および覆土中から少量の土器片が得られたが、図示できたのは、南比企窯跡群産の須恵器杯2点である。本住居跡の生活段階にともなうものと断定できる遺物はなかった。

第3号竪穴住居跡（第10～17図）

B2・3、C2・3グリッドで検出した。平面形はほぼ方形であった。

当住居跡については、柱穴および掘り方の調査によって、2度以上の拡張および上層の建替えが行われたことがわかった。最終段階の竪穴部の規模は、南北7.06m、東西6.69m、深さ0.32mと大型になっており、主軸方位はほぼN-Sであった。掘り方で検出した壁溝によって計測した拡張前の竪穴部の規模は、南北方向については拡張時の粗掘りのため明確にできなかったが、東西で約5.90m、主軸方位はほぼN-Sであった。集落南端部の斜面地に立地するため、竪穴部南壁上端付近は上層の掘込みによって失われていた。

カマドのある北側壁部分第2号竪穴住居跡と、中央以南が第5号竪穴住居跡と重複関係にあり、土層断面・遺構の破壊状況および掘り方の確認から、第3号竪穴住居跡が第2・5号竪穴住居跡に遅れて建築されたと判断できた。

覆土は黒褐色土主体で、少量の焼土と地山ローム層に起源をもつローム粒を含んでいた。床面には部分的に焼土が多く分布する箇所が認められた。

壁面は、壁溝底面から垂直に立ち上がっていた。壁溝は、拡張前後とも全周しており、拡張後で幅20～30cm程度、深さ15cm程度、拡張前で幅20cm程度、深さ10cm程度が残存していた。

拡張後のカマドは北側壁面に設置されていた。燃焼部覆土は、天井部の崩落層（8層）下に多量の焼土ブロックからなる12層が認められた。12層は、カマド燃焼部床面が焼土化したものである可能性もあるが、さらに下部には多量の焼土ブロックを含む29層が存在していた。灰層が認められず常に灰をかきだしていたと考えられることから、燃焼部底面が焼けたものと積

極的に認めることはできない。天井崩落後、崩落層である12層上面を燃焼部下面として用いていたものと解釈できる。

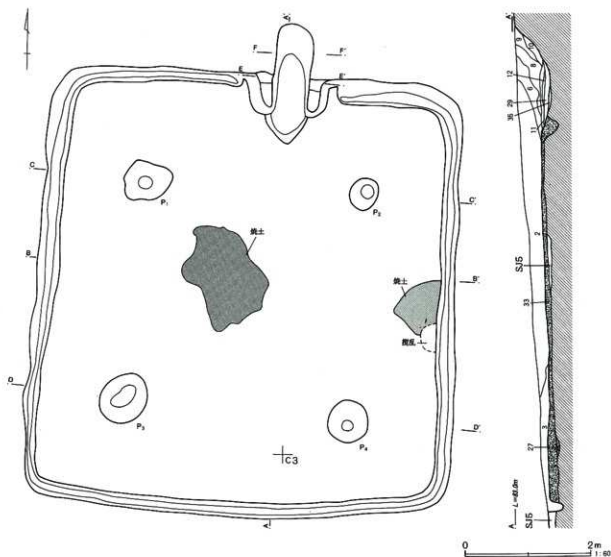
燃焼部床面は、竪穴部床面より15cm前後の深さに掘り窪められており、底面はすり鉢状であった。カマド前面には、掘り方調査の結果、ビット状の掘り込みが認められたが、平安時代以後のカマドにみられる深い掘り込みと共通するものであると判断できる材料はなかった。煙道は、緩やかに立ち上がり確認面付近でさらに角度を緩めていた。

袖部は基部を地山ローム層の掘り残しとして構築し、上部に粘土を積み上げていた。煙道は、周囲を大きく掘り込んだ後、粘土を貼り付けたものである。

拡張前のカマドは検出することができなかった。同位置に設置されていた可能性が高い。

柱穴は、2もしくは3回の掘り直しが行われており、断面調査の結果から、次第に上層が拡張されて最終的に大型の住居跡になったことがわかった。対応する組み合わせは図示したとおりで、拡張前後とも4本で整った長方形に配置されていた（第12図）。対応関係が確実な柱穴のうちでもっとも古いと考えられるのは、P1-4のいずれも1としたもので、柱間は約300cm、深さはP1-1が72cm、P2-1が54cm、P3-1が62cm、P4-1が44cmであった。次期には大きな拡張が行なわれており、柱間は360cm、深さはP1-2が72cm、P2-2が67cm、P3-2が60cm、P4-2が56cmであった。最終的な住居跡では、柱間は360cmと規模の拡張は認められず、深さはP1-3が72cm、P2-3が79cm、P3-3が79cm、P4-3が98cmであった。なお、P2・P4にはさらに内側に位置する柱穴が設けられており、柱間は270cm、深さはそれぞれP2-4で72cm、P4-4で53cmと平面的には小規模であった。3回の柱穴の掘り直しによってP1・3では柱穴が破壊されたことも考えられる。この2基がもっとも古い柱穴であるとすれば、当住居跡は柱間距離で一辺約90cm拡張され、後には同規模に建替えられたことになる。

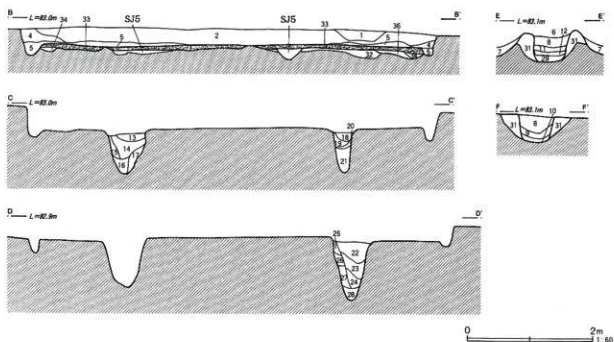
第10図 第3号竪穴住居跡(I)



- 1 黒褐色 覆土
- 2 黒褐色 ローム粒・焼土粒多
- 3 黒褐色 ローム粒・焼土粒少
- 4 暗褐色 ローム粒含む。焼土粒少
- 5 褐色 ロームブロック多、ローム粒多、焼土粒少
- 6 褐色 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒多
- 7 褐色 ロームブロック多、ローム粒少、焼土粒多、粘土粒多
- 8 橙赤褐色 ローム粒少、焼土ブロック多、焼土粒多、粘土粒多、カマド天井崩落土
- 9 赤褐色 ローム粒少、焼土ブロック多、焼土粒多、粘土粒
- 10 暗褐色 ローム粒多、焼土ブロック、焼土粒多、粘土粒少
- 11 暗赤褐色 ローム粒少、焼土ブロック少、焼土粒多、粘土粒少、カマド下灰層
- 12 赤褐色 焼土ブロック多、焼土粒多、カマド火床面
- 13 黒褐色 ローム粒、焼土粒

- 14 黒褐色 ロームブロック、ローム多、焼土粒多
- 15 褐色 ロームブロック多、ローム多、焼土粒少
- 16 褐色 ロームブロック多、ローム多
- 17 黄褐色 ロームブロック多、ローム多
- 18 黒褐色 ローム少、焼土粒
- 19 褐色 ロームブロック多、ローム多、焼土粒少
- 20 褐色 ローム、焼土粒多
- 21 黄褐色 ロームブロック多、ローム多
- 22 黒褐色 ローム少、焼土粒少
- 23 暗褐色 ローム少、焼土粒少
- 24 黒褐色 ローム少、焼土粒少、暗褐色土ブロック
- 25 黒褐色 ロームブロック、ローム多、焼土粒少
- 26 黒褐色 ロームブロック、ローム少、焼土粒少
- 27 黒褐色 ロームブロック多、ローム少
- 28 黒褐色 ロームブロック多、ローム少
- 29 黄褐色 ロームブロック多、ローム多、焼土ブロック多、焼土粒多

第11図 第3号竪穴住居跡(2)



- 30 暗褐色 ローム、焼土ブロック少、焼土粒多
 31 オリーブ褐色 ローム少、焼土ブロック、焼土粒多
 32 暗褐色 ロームブロック多、ローム多、焼土ブロック、焼土粒、2次拡張時の貼床
 33 黄褐色 ロームブロック多、ローム多、焼土ブロック、焼土粒、2次拡張時の貼床

- 34 暗褐色 ロームブロック少、ローム、焼土粒、1次拡張時の壁溝
 35 黄褐色 ロームブロック、ローム多、焼土ブロック少、焼土粒多
 36 暗褐色 ロームブロック多、ローム多、焼土ブロック少、焼土粒、1次拡張時の貼床

貯蔵穴は検出できなかった。

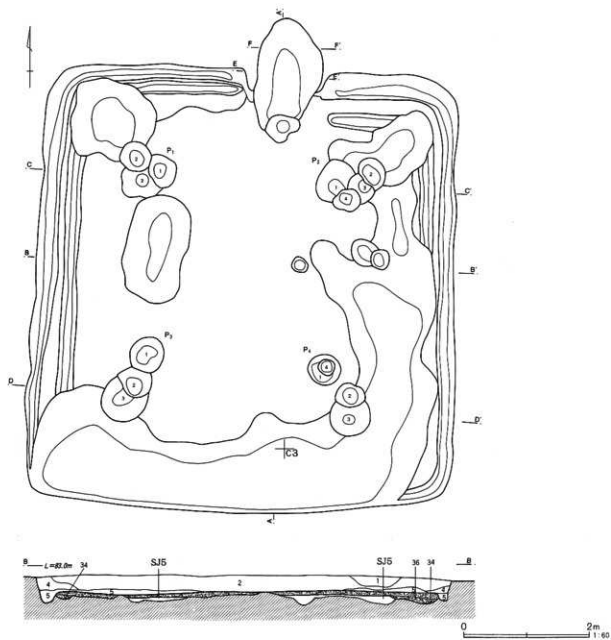
床面の硬化状況などについては、把握できなかった。竪穴部の掘り方は、第1号竪穴住居跡と類似しており、四隅を深く掘り下げていたが、南側壁際部分がか帯状に掘り下げられていた。貼床材には、黒色土のブロックに多量のロームブロックを混合した土壌が用いられていた。カマド周辺に若干硬化した部分が認められた。若干の凹凸が遺存していたが、光沢や粒子の均一化の状況は判然としなかった。

出土遺物は、カマド前面を中心に多く検出できたが、床面より5~10cm程度上位の覆土中から出土したものがほとんどである。内訳は、南比企窯跡群産の須恵器壺・杯・碗・壺・小型壺・瓶類・甕・瓦、土師器杯・甕、若干の鉄製品(刀子・釘等)と鉄滓、青銅製帯金具(鑑方)1点が出土した。須恵器をみる限り、形態および製作技法上では共通性が高いものの、本来的に

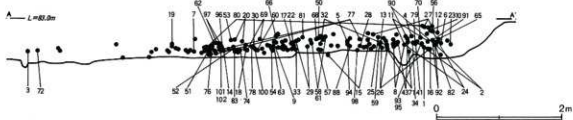
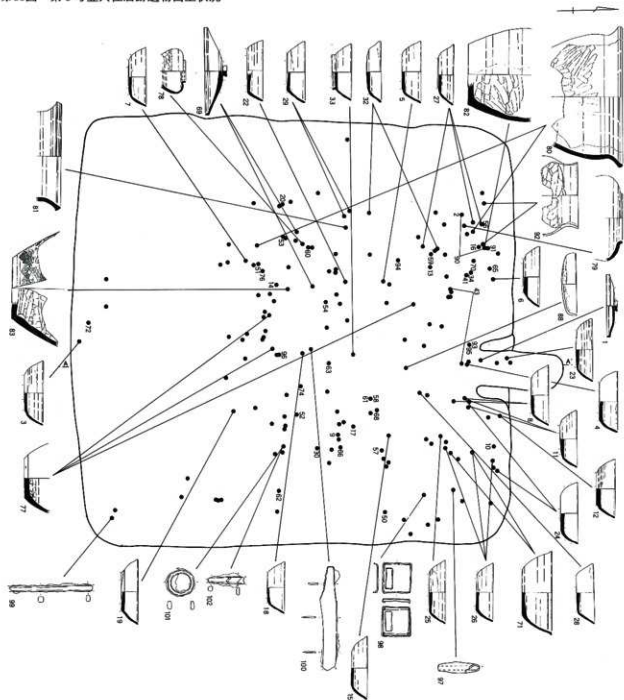
当住居跡の生活段階にともなうか、近い時期に流入したと推定できる遺物は、カマド周囲の壁上から落下したと考えられる須恵器杯第14図6・23・24のほか、同様に壁上から転落した可能性のある須恵器杯第14図3、カマド脇に置かれていた可能性がある25・26等の6点程度である。青銅製の帯金具(鑑方)は、田中による分類(田中1990)の方形四脚銀小孔にあたる表金具である。「日高市史」「稲荷・常木久保・宮ノ後遺跡」には黒漆塗りとの記載がある(中平1997)が、ブロンズ病といわれる錆が進行しており、表面のほとんどが剝離している状態で、表側に点々と黒色の光沢が認められるが、漆の塗膜を観察することはできない。成分分析を経ない現状では、青銅特有の黒色の錆と区別することはできず、漆と断定することはできない。

なお、日高市教育委員会による試掘調査の際、覆土上層からクルミの核1点が出土している。

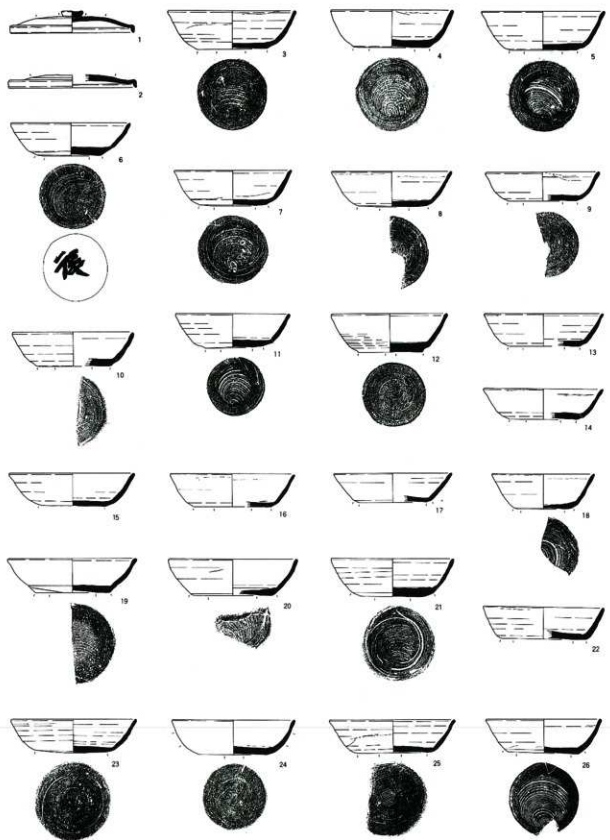
第12図 第3号竪穴住居跡掘り方



第13图 第3号竖穴住居跡遺物出土狀況



第14图 第3号竖穴住居跡出土遺物(I)

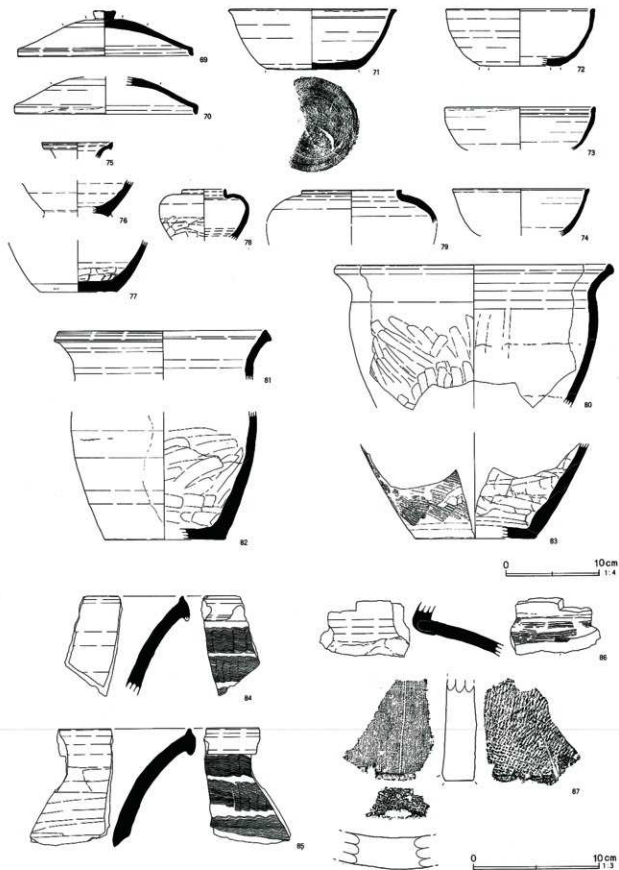


0 10 cm
1:4

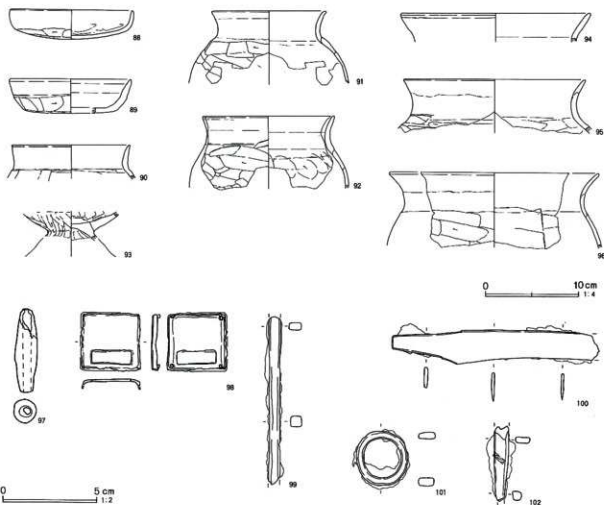
第15图 第3号竖穴住居跡出土遺物(2)



第16图 第3号竖穴住居跡出土遺物(3)



第17図 第3号竪穴住居跡出土遺物(4)



第3号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第14~17図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存半	備考
1	蓋	(13.0)	2.4		AEFGH	A	灰白	55	内: 仕上ナテ 外: 割・仕上ナテ 口縁仕上痕
2	蓋	(13.5)			AEFGH	A	灰	50	外: 割・仕上ナテ 南比企
3	杯	13.7	4.1	7.4	AFGH	A	灰白	95	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 口縁仕上痕 成形痕
4	杯	(13.1)	4.0	8.1	AEFGH	A	にょい黄橙	50	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 口縁仕上痕 底痕記
5	杯	13.0	4.1	7.2	AEFGH	A	にょい橙	75	底: 糸周磨 南比企
6	杯	12.7	3.5	4.9	AEFG	A	灰黄	95	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 墨書「後」或「奉」
7	杯	12.9	3.8	7.3	AFG	A	灰	40	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 南比企
8	杯	(12.9)	3.7	(7.4)	AEFG	A	灰	30	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
9	杯	(11.2)	3.1	7.2	AEFG	A	灰	40	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 成形痕 南比企
10	杯	(13.0)	3.6	(7.8)	AEFG	A	灰黄	20	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 南比企
11	杯	12.2	3.6	6.2	AEFG	A	灰	90	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 口縁仕上痕 成形痕
12	杯	(12.4)	4.1	6.9	AFG	A	灰	50	底: 糸周前後磨 内外: 仕上ナテ
13	杯	12.8	3.6	7.3	AEG	A	灰	30	底: 糸周前後磨 内外: 仕上ナテ 口縁仕上痕
14	杯	(12.6)	3.2	(7.0)	EFGH	A	灰	30	底: 糸周磨 口縁仕上痕 南比企
15	杯	13.2	3.5	6.6	AEFG	A	灰白	70	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 南比企
16	杯			(8.4)	AEFG	A	灰黄	25	底: 糸周磨 外: 仕上ナテ 口縁仕上痕 底痕記
17	杯	(12.5)	3.0	(7.2)	AEFG	A	灰	25	底: 割 内外: 仕上ナテ 南比企
18	杯	(11.0)	3.7	(6.2)	AFG	A	灰	35	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 口縁仕上痕
19	杯	(13.8)	3.7	(7.8)	AEFG	A	橙	40	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 成形痕 南比企
20	杯	(13.8)	3.8	(8.2)	AGGH	A	にょい橙	15	底: 糸周磨 内外: 仕上ナテ 南比企

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
21	杯	(13.2)	4.1	7.0	AEFG	A	灰黄	50	底:糸周削 南比企
22	杯	(13.0)	3.3	(9.1)	AEFG	A	灰黄	40	底:糸周削 外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
23	杯	13.4	3.6	7.7	AEFG	A	灰白	75	底:全削 内:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
24	杯	(13.2)	3.7	7.0	AEFGH	A	灰黄	75	底:糸周端削後磨 外:下半回転ヘラミガキ 南比企
25	杯	13.5	3.6	7.9	AEFGH	A	灰	65	底:糸周削 内外:仕上ナテ 成形痕 南比企
26	杯	12.4	3.7	7.5	AFG	A	黄灰	75	底:糸周磨 内外:仕上ナテ 口縁仕上痕
27	杯	12.6	3.4	6.4	AEFGH	A	灰	100	底:全削 墨書「工下」 南比企
28	杯	(13.2)	3.8	7.7	AEFGH	A	灰白	65	底:糸周磨 内外:仕上ナテ 成形痕
29	杯	13.0	3.9	7.6	AEFGH	A	橙	45	底:糸周磨 南比企
30	杯	(13.3)	3.6	(8.4)	EPG	A	灰黄	35	底:糸周削 内:仕上ナテ 南比企
31	杯	(14.2)	3.5	(9.7)	AEFG	A	灰白	20	底:全削 内外:仕上ナテ 成形痕 南比企
32	杯	(13.0)	3.2	9.0	AEFG	A	灰黄	50	底:全削 内外:仕上ナテ 成形痕 南比企
33	高台杯	12.0	4.1	7.4	AEFG	A	灰	95	底:糸周削 内外:仕上ナテ 南比企
34	高台杯	(11.2)	4.2	(5.6)	AEFG	A	灰	25	底:全削 内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
35	高台杯			(6.9)	AEFG	A	灰白	45	底:全削 内:仕上ナテ 南比企
36	杯	(14.4)			AEFGH	A	にぶい黄橙	30	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
37	杯	(13.2)			AEFGH	A	にぶい黄橙	20	内外:仕上ナテ 成形痕 南比企
38	杯	(13.3)			AEFG	A	灰黄	20	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 成形痕 南比企
39	杯	(14.4)			AEFG	A	灰黄	30	内外:仕上ナテ 南比企
40	杯	(13.4)			AEFG	A	灰黄	20	内:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
41	杯	(12.8)			AEFGH	A	灰黄	15	内外:仕上ナテ 成形痕 南比企
42	杯	13.0			AEFGH	A	灰	50	内:仕上ナテ 成形痕 南比企
43	杯	12.8			AEFG	A	灰黄褐	75	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 成形痕 南比企
44	杯	(11.4)			AEFG	A	黄灰	10	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
45	杯	(12.4)			AFG	A	黄灰	5	外:仕上ナテ 成形痕
46	杯	(12.6)			AEFG	A	灰	40	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
47	杯	(12.4)			AEFGH	A	にぶい褐	25	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
48	杯	(12.2)			AEFG	A	にぶい橙	25	外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
49	杯	(11.8)			AEFG	A	灰	20	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 成形痕 南比企
50	杯			8.1	AEFG	A	灰白	75	底:全削 内:仕上ナテ 墨書「部」 南比企
51	杯			(8.6)	AEFGH	A	灰	45	底:全削 内外:仕上ナテ 南比企
52	杯			(8.8)	AEFG	A	にぶい黄橙	30	底:全削 内:仕上ナテ 南比企
53	杯			9.3	AEFG	A	暗灰黄	55	底:全削 内:仕上ナテ 南比企
54	杯			(7.1)	ACDEFG	B	灰白	70	底:糸周削 内:仕上ナテ 南比企
55	杯			(7.2)	AFG	A	灰	25	底:糸周削 内外:仕上ナテ
56	杯			(7.6)	AEFG	A	にぶい黄橙	35	底:糸周磨 内外:仕上ナテ 底記 南比企
57	杯			(8.4)	AEFG	A	灰	25	底:糸周削 タール状物質付着 南比企
58	杯			7.6	AEFG	A	黄灰	80	底:糸周削 内外:仕上ナテ 南比企
59	杯			7.8	AEFG	A	黄灰	65	底:糸周削 内外:仕上ナテ 底記 南比企
60	杯			7.4	AEFGH	A	灰	85	底:糸周削 内外:仕上ナテ 底記墨書「下」
61	杯			6.1	AEFG	A	灰オリーブ	80	底:糸周削 内外:仕上ナテ 底記 南比企
62	杯			7.8	AEFG	A	灰	75	底:糸周削 内外:仕上ナテ 底記 南比企
63	杯			(7.4)	AFG	A	灰	50	底:糸周削 内:仕上ナテ
64	杯			(7.6)	AEFG	A	灰	45	底:糸周磨 内:仕上ナテ 南比企
65	杯			7.0	AEFGH	A	にぶい黄褐	80	底:糸周磨 底記 南比企
66	杯			(9.8)	EPGH	A	にぶい黄	40	底:糸周削 内外:仕上ナテ 底記 南比企
67	杯			(9.8)	AEFG	A	灰黄	40	底:糸周磨 内外:仕上ナテ 南比企
68	底 部			(12.8)	AEFG	A	灰黄	25	底:糸周削 内外:仕上ナテ 杯 or 碗 南比企
69	蓋	(18.6)	4.8		AEFG	A	灰オリーブ	25	外:削・仕上ナテ つまみ基部径2.4cm 南比企
70	蓋	(19.3)			AEFG	A	にぶい黄橙	15	内:仕上ナテ 外:削・仕上ナテ 口縁仕上痕
71	蓋	(17.8)	6.4	9.9	AEFGH	A	にぶい黄橙	50	底:全削 内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
72	碗	(15.9)	6.1	(8.6)	AEFG	A	灰オリーブ	40	底:糸周削 重燒 南比企
73	碗	(15.8)			AEFGH	A	灰	20	内外:仕上ナテ 口縁仕上痕 南比企
74	碗	(14.7)			AEFGH	A	灰オリーブ	25	内外:仕上ナテ 口縁端部面取 南比企
75	瓶	(7.6)			AFG	A	灰	25	外:仕上ナテ
76	瓶				FG	A	褐灰	25	外:仕上ナテ後回転削

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
77	瓶			8.2	FG	A	暗灰黄	60	底：全前後仕上ナテ 外：仕上ナテ後回転ヘラ磨
78	短頸壺	(4.6)			AFG	A	黄灰	25	外：ヘラナテ 最大径9.1cm
79	短頸壺	(10.7)			AG	A	黄灰	15	口縁面取後仕上ナテ 最大径18.2cm
80	鉢	(29.8)			DEFG	A	灰黄褐	15	内：ヘラナテ 外：仕上ナテ後ヘラナテ
81	甕	22.2			AFG	A	灰	5	外：仕上ナテ
82	甕			(13.0)	AFG	A	灰	30	内：ヘラナテ 外：仕上ナテ
83	甕			(13.0)	AFG	A	灰	20	底部ヘラナテ 車金子
84	甕				AG	A	灰白	5	櫛ガキ波状文 13条一単位
85	甕				AG	A	黄灰	5	櫛ガキ波状文 13条一単位
86	甕				FG	A	黄灰	5	内：無紋のアテ具痕 外：タタキ
87	平瓦				G	A	暗灰黄		凹面布目 凸面縄目タタキ 端面削
88	杯	(13.2)	3.1	11.8	ABEG	A	橙	50	底：全削 内外：ヘラナテ 南比企
89	杯	(13.2)			AG	A	橙	25	底：全削 外：削後ナテ
90	台付甕	(12.7)			ABCDG	A	橙	25	内：ヘラナテ 外：削
91	台付甕	(12.2)			ACDFG	A	にぶい黄褐	20	外：削
92	台付甕	(12.1)			ABCFG	A	橙	20	内：指ナテ 外：削 口縁仕上痕
93	台付甕			4.9	ABCFG	A	にぶい赤褐	65	内：ヘラナテ 外：削
94	甕	(20.4)			ABCDG	A	橙	25	内外：ヘラナテ 口縁仕上痕
95	甕	(19.4)			ABCG	A	明黄褐	25	内：ヘラナテ 外：削 成形痕
96	甕	(22.4)			ACG	A	にぶい黄褐	20	内：ヘラナテ 外：削
97	土 甕	長4.4cm、径1.2cm			G	A	灰黄褐	80	孔径0.5cm、5.44g
98	巡方	縦3.1cm、横3.1cm、厚さ0.4cm、8.20g							
99	鉄 鏝	長8.8cm、刃幅0.65cm、11.53g							
100	刀 子	長11.1cm、幅1.8cm、17.22g							
101	鉄製品	径2.9cm、幅0.8cm、厚さ0.35cm、14.14g							
102	不明鉄製品	長3.9cm、幅0.75cm、厚さ0.5cm、5.80g							

第4号竪穴住居跡 (第18図)

B3グリッドで検出した。東側の大部分が調査範囲外にあたり、調査できたのは竪穴部の3分の1程度と考えられる。

平面形はほぼ方形と予想できた。竪穴部の規模は、南北3.45m、深さ0.44m、主軸方位は不明であるが、西側壁面の方位はN-15°-Wであった。

西側壁付近で第2号竪穴住居跡と南北壁付近で第2号掘立柱建物跡柱穴と重複関係にあり、遺構の破壊状況および確認面における土壌の状況から、第4号竪穴住居跡が第2号竪穴住居跡および第2号掘立柱建物跡に隠れて掘削されたものと判断した。なお、第2号掘立柱建物跡との重複部分については、下層まで一時に掘り上げてしまったため記録することができなかった。

覆土は黒色土主体で、少量の焼土と地山ローム層に

起源をもつローム粒を含んでいた。床面を覆う3層には多量のロームブロックが含まれており貼床層とも考えられたが、凹凸や光沢・粒子の均一化など硬化の条件が満たせず、判断できなかった。

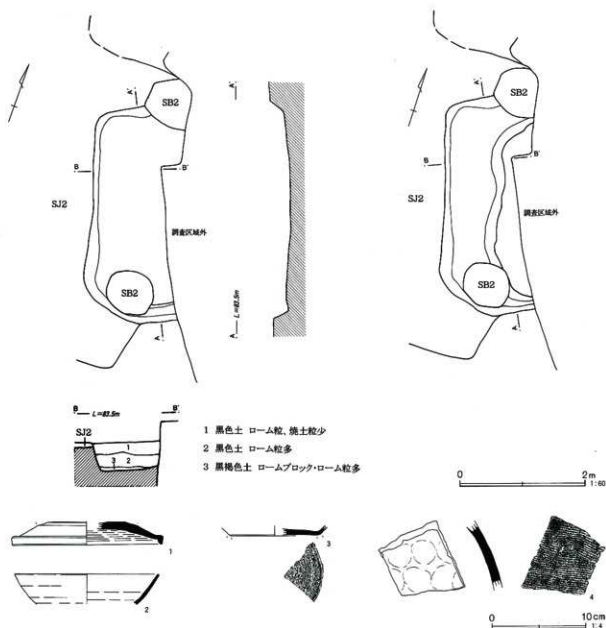
壁面は、ほぼ垂直に立ち上がっていた。壁溝は検出できなかった。

カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出できなかった。

竪穴部の掘り方は、第2号竪穴住居跡に類似したもので、西側壁際部分が帯状に掘り下げられていた。

出土遺物は、床面から10~40cm程度上位の1・2層中に散在していた。内訳は、南比企窯跡群産の須臾器蓋(第18図1)・杯(同図2・3)、末野窯跡群産と思われる須臾器甕片(同図4)が出土した。いずれも当住居跡の生活段階にともなうものと断定できる遺物ではなかった。

第18図 第4号竪穴住居跡および出土遺物



第4号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	(16.2)			AFG	A	灰	20	外:削・仕上ナテ
2	杯	(15.5)			AEFG	A	灰	20	南比企
3	杯			(9.8)	AEFG	A	におい湯	25	底:全削同磨 内外:仕上ナテ タール付着
4	甕				AFGH	A	灰		平行タタキ 未野

第5号竪穴住居跡 (第19図)

B2・3、C2・3グリッドで検出した。平面形はほぼ方形であった。竪穴部の規模は、南北5.22m、東西約5.00m、深さ0.05m、主軸方位はN-13°Eで

あった。他の住居跡がほぼ正方位を基軸に構築されているのに対して、傾きが大きいことが特徴である。

南側壁付近を除いて大部分が第3号竪穴住居跡と重複しており、土層の断面観察・遺構の破壊状況および

掘り方の確認から、第5号竪穴住居跡が第3号竪穴住居跡に先行して建築されたと判断できた。第3号竪穴住居跡による破壊に加え、集落南端部の斜面地に立地することから、竪穴部上部は大半が失われていた。

竪穴部の範囲は、主に第3号竪穴住居跡の掘り方調査に際して検出した壁溝から確認したものである。

一部に残存した覆土は黒褐色土主体で、少量の焼土と地山ローム層に起源をもつローム粒を含んでいた。

壁面は、壁溝底面からほぼ垂直に立ち上がっていた。壁溝は全周していたと考えられ、検出できた部分で幅20～25cm程度、深さ12cm程度であった。

カマドは北側壁面に設置されていた。燃焼部覆土は、多量の焼土粒とロームブロックを含む黒褐色土が主体であったが、第3号竪穴住居跡貼床との識別が難しく、焼土分布をもって把握した。燃焼部床面は、竪穴部床面より18cm前後の深さにすり鉢状に掘り窪められていた。カマド前面には、ピット状の掘り込みが認められたが、使用時に掘り込みとして存在していたか埋め戻されていたか判断できなかった。煙道は第3号竪穴住居跡によって破壊されていた。袖部は掘り込みとして痕跡を検出した。第1～3号竪穴住居跡等、正方位に構築された住居跡のカマド袖部が基部を地山ローム層の掘り残しとして構築していたのに対して、袖下部を掘り込んで上部に構築材を盛り上げる構築方法であったと考えられる。

柱穴は、4本で整った方形に配置されていた。柱間は約230cm、深さはP1が36cm、P2が38cm、P3が54cm、P4が48cmであった。

貯蔵穴は検出できなかった。

床面は第3号竪穴住居跡構築時の貼床敷設によって破壊されており、本来の表層を把握することができなかった。このため、硬化状況などについては明らかにできなかった。

竪穴部の掘り方は、重複による破壊を免れた南側壁際部分の断面観察からみて、第2・4号竪穴住居跡のように周囲を掘り下げたと推測できるが、明確な判断

を下す材料は得られなかった。貼床材には、黒色土ブロックに多量のロームブロックを混合した土壌が用いられていた。

出土遺物は、覆土中から南比企窯跡群産の須恵器杯・甕片等が少量出土したが、図示できたのは第19図1の須恵器杯底部片1点である。当住居跡の生活段階にともなうものとは考えられない。

第6号竪穴住居跡（第20図）

C3・4グリッドで検出した。東側の大部分が調査範囲外にあたり、調査できたのは竪穴部の4分の1以下である。

平面形はほぼ方形であったと思われる。竪穴部の規模は、南北3.20m前後、深さ0.34m、主軸方位は不明であるが、西側壁面の方位はN-3°-Wであった。

調査範囲内では、他の遺構との重複関係は認められなかった。

覆土は黒色土主体で、少量の焼土と地山ローム層に起源をもつローム粒を含んでいた。

壁面は垂直に立ち上がっていたが、上端部付近では崩落したためか、傾きが緩くなっていた。

壁溝は確認できた範囲内では全周していた。幅15～25cm、深さ6～17cmであった。

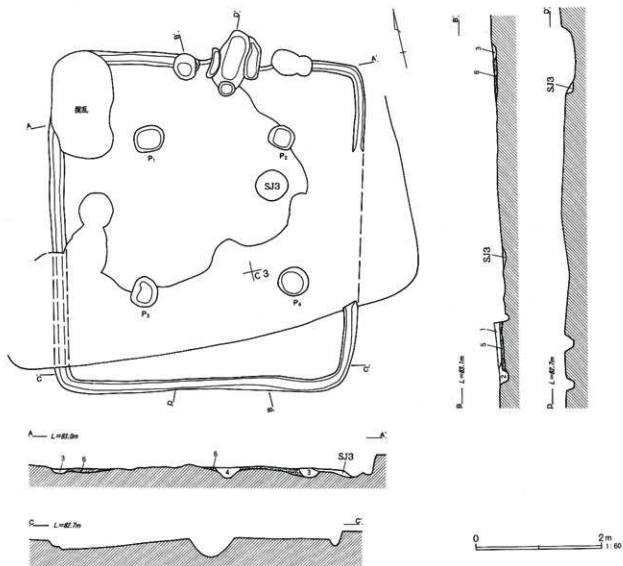
カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出できなかった。

竪穴部の掘り方は、西側壁際部分が帯状に掘り下げられていた。第2・4号竪穴住居跡のように周囲を掘り下げたものと考えられる。

貼床材には、多量のロームブロックを含む黒色土を主体とした土壌が用いられていた。床面には、明瞭な硬化の痕跡を見いだすことはできなかった。

出土遺物は、覆土中から南比企窯跡群産を中心とした須恵器杯・瓦、土師器甕片等が少量得られたが、図示できたのは第20図1～8に限られる。いずれも当住居跡の生活段階にともなうものと断定できる遺物ではない。

第19図 第5号竪穴住居跡および出土遺物



- 1 黒褐色 ローム、焼土ブロック少、焼土粒、SJ5覆土
- 2 黒褐色 ロームブロック少、ローム、焼土ブロック少、焼土粒、SJ5覆土
- 3 黒褐色 ロームブロック少、ローム、焼土ブロック、焼土粒、SJ5覆土
- 4 暗褐色 ロームブロック少、ローム多、焼土ブロック、焼土粒多、SJ5カマド
- 5 黒褐色 ロームブロック多、ローム、焼土粒多、SJ5貼床
- 6 暗褐色 ロームブロック多、ローム多、焼土粒少、SJ5貼床

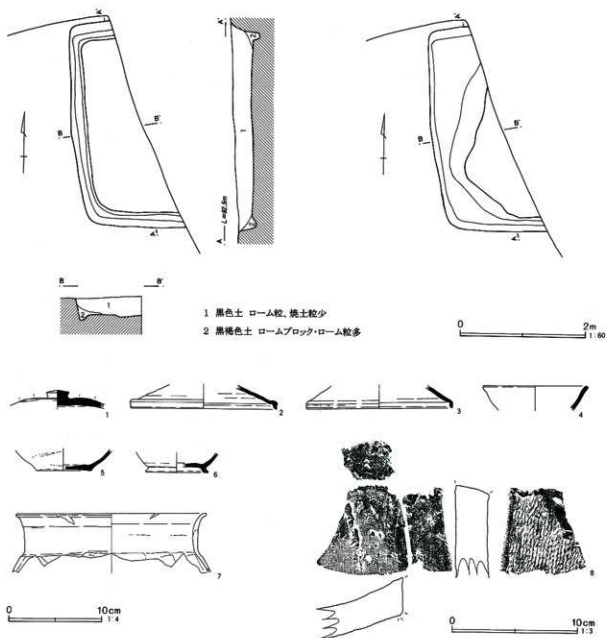


0 10 cm
1:4

第5号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯			(8.6)	AEFG	A	灰黄褐	5	底：全削閉磨 内外：仕上ナア 南比企

第20図 第6号竪穴住居跡および出土遺物



第6号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋				AFG	A	灰白	75	底; 周削 内外; 仕上ナテ つまみ基部径2.4cm
2	蓋	(15.6)			AFG	A	灰黄	15	内外; 仕上ナテ
3	蓋	(15.6)			AEPFGH	A	灰黄褐	20	内外; 仕上ナテ 口縁仕上痕
4	杯	(11.2)			AEPFG	A	黄灰	15	内外; 仕上ナテ 南比企
5	杯			(5.9)	AEPFG	A	灰	25	底; 糸 南比企 成形痕
6	高台杯			(6.8)	AEPFG	A	灰オリーブ	25	底; 全削 南比企
7	甕	(20.4)			ABCFG	A	明赤褐	20	内; ヘラナテ 外; 削
8	平瓦				AFG	A	黄灰		凹面布目 凸面縄目タタキ 端面削

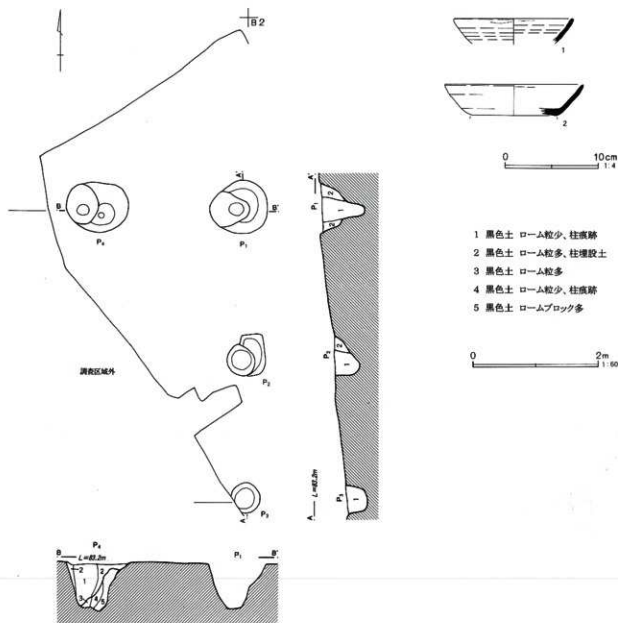
(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第21図)

B1グリッドで検出した。調査範囲限界にかかって東の側柱穴列が検出できたもので、西部および南部が調査範囲外となったため、梁行・桁行とも明確にはできなかった。およそ2間×3間程度であったと考えら

れる。主軸は不明であるが、柱穴がとおる東の側柱穴列の軸は、ほぼN-Sであった。柱穴はP1・P2・P4で掘り直しが認められ、1回以上の上屋の建替えが行われたことがわかった。柱間は、重複前後とも、約240cmで統一されていた。

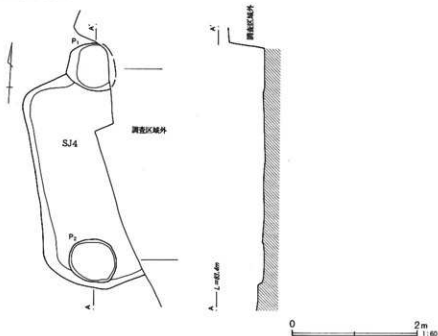
第21図 第1号掘立柱建物跡および出土遺物



第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第21図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(12.9)			AEFG	A	灰	5	口縁上痕 南比企
2	杯	(14.8)	3.3	(9.0)	AEFG	A	褐灰	10	底:全削 内外; 上ナナテ 口縁上痕 南比企

第22図 第2号掘立柱建物跡



柱穴覆土の断面観察では、建替えの前後ともに、柱の抜き取り痕跡はなく柱痕跡を確認することができた。各柱穴の深さは、それぞれ確認面から、P 1が66cm、P 2が38cm、P 3が32cm、P 4が67cm、建替え前のP 4が73cmであった。

出土遺物は、P 2からは第21図2に、P 4からは同図1にそれぞれ示した南比企窯跡群産の須恵器杯片を得ることができた。竪穴住居跡等、他の遺構の方位と側柱の軸方位との共通関係からみて、出土遺物と遺構の存続時期が重なる可能性は低いと思われる。

第2号掘立柱建物跡（第22図）

B 3グリッドで検出した。調査範囲限界にかかって西の側柱穴列が検出できたもので、東部は調査範囲外となった。梁行・桁行とも明確にはできなかったが、およそ2間×3間程度であったと考えられる。主軸は

不明であるが、柱穴がとおる東の側柱穴列の軸は、ほぼN-Sであった。第4号竪穴住居跡と重複関係にあり、遺構の攪乱状況から第4号竪穴住居跡に先行して建築されたと判断した。

柱穴は掘り方底面付近を2基確認した。いずれも平面形が方形もしくは楕円形で、柱間が330cm程度と広く、掘り方中央に第4号竪穴住居跡によって破壊された柱穴の存在が想定できる。第4号竪穴住居跡における掘り方調査時に検出したもので、柱穴覆土は第4号竪穴住居跡貼床層と区別できず、明確に記録できなかった。P 1・P 2とも深さは、5～8cm程度であった。

出土遺物はなかった。

西の側柱穴列の方位および第4号竪穴住居跡との重複状況からみて、第1～3号竪穴住居跡および第1号掘立柱建物跡と存続時期が一致する可能性が高い。

2. その他

(1) 土 壌

第1号土壌 (第23図)

A 2グリッドで検出した。平面形はほぼ正円形、径135cm程度、深さ17cmであった。底面は平坦で、壁面はほぼ直立していた。覆土は褐色土を主体とし、地山のローム層起源のローム粒を含んでいた。出土遺物は、平安時代に属する南比企窯跡群産の須恵器杯片、末野窯跡群産と思われる須恵器甕片等を得たが、図示できるものはなかった。平安時代以後、近世までの期間に掘削されたものと考えられる。

第2号土壌 (第23図)

A 2・B 2グリッドで検出した。平面形は整った長方形で、長辺188cm、短辺107cm程度、深さ27cmであっ

(2) その他の出土遺物 (第24・25図)

今回の調査では、遺構に属さない遺物が出土した。また、地山ローム層上面の確認調査や住居跡掘り方の調査において、旧石器時代の細石器・剃片が、わずかではあるが出土した。これらを一括して第24図に掲載した。

地山ローム層については、第24図3に示した細石刃出土後、その周辺を中心に調査期間の許す限り精査を行ったが、石器集中や包含層を検出することはできなかった。また、住居跡掘り方精査中に検出した剃片については、粗掘り時に検出したため、出土位置等に関する詳細な情報は記録できなかった。

1・2は、奈良時代に属する南比企窯跡群産の須恵器

杯。北東側の隅が調査範囲外となった。底面は平坦で、壁面はほぼ直立していた。長軸方位はN-68°Eであった。覆土は、第1号土壌の上層とほぼ同じで、褐色土を主体とし、地山のローム層起源のローム粒を含んでいた。出土遺物はなかった。覆土からみて、第1号土壌と大差ない時期に埋没したものと考えられる。

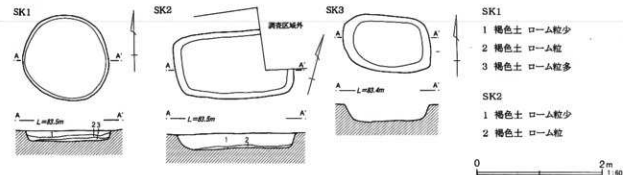
第3号土壌 (第23図)

B 2グリッドで検出した。平面形は不整な楕円形で長径138cm、短径90cm、深さ28cmであった。底面はほぼ平坦で、壁面は急に立ち上がっていた。出土遺物はなかった。掘削された時期および埋没時期は不明である。

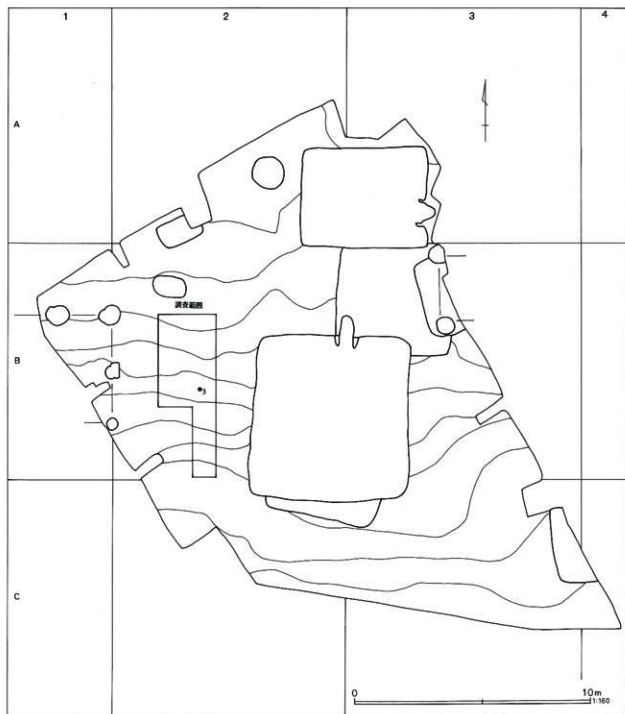
器杯である。

3は、地山ローム層上面の遺構確認中に出土した黒曜石製細石刃である。出土位置を第24図に示した。下部を欠損している。側面に二次加工とみられる剥離痕がある。一回性の剥離が多く、剥離面および刃部の磨き痕・摩耗も少なく、使用による刃こぼれとは考えにくい。長さ2.1cm、幅0.8cm、厚さ0.15cm、重さ0.36gである。

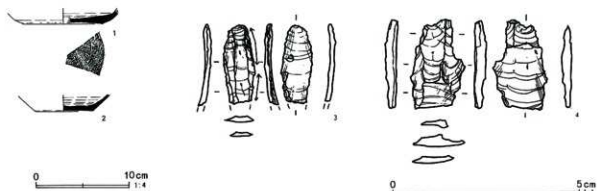
4は、黒曜石製の縦長剃片である。第6号竪穴住居跡の掘り方調査のため、貼床層剥離中に出土した。長さ2.35cm、幅1.4cm、厚さ0.25cm、重さ0.82gである。



第24図 旧石器時代の確認範囲



第25図 その他の出土遺物



その他の出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯			(9.6)	AEPFGH	A	黄灰	20	底：全削 内外；仕上ナデ 南比企
2	杯			6.4	FGH	A	灰白	75	底：糸 外；仕上ナデ
3	細石刃	長2.1cm、幅0.8cm、厚さ0.15cm、0.36g							
4	剥片	長2.35 cm、幅1.4cm、厚さ0.25cm、0.82g							

V 調査の成果

南比企産須恵器杯の成形技術と法量について

宮ノ後遺跡では、正方位を軸に建築された竪穴住居跡・掘立柱建物跡を検出した。これらの建物跡には建替え・拡張を繰り返すなど、複雑な重複関係が認められた。方位に沿って周辺をみわたすと、宮ノ後遺跡から常木久保遺跡S J12までのまとまりが、周辺部と区別できることがわかる（第3図）。

当遺跡群は、奈良時代から平安時代にまたがる時期に成立したもののだが、正方位を軸とする建物跡群は、須恵器杯底部にヘラケズリ調整が行われる期間を主な存立時期としている。中平窯による時期区分では1・2期にあたる（中平1997）。平安時代を中心に展開したと思われる稲荷・常木久保遺跡北側の建物跡群とは、時期的にも区別できる。

律令体制の地方浸透の状況を検討する際に、当遺跡群は重要な位置を占めると思われ、各遺構の存立時期を明確にするのは必要条件の一つである。本書における報告分には、良好な出土状態といえないまでも、量的にまとまった須恵器類を出土したS J3がある。出土した須恵器類は杯を主体としており、ほとんどが南比企産須恵器の胎土の特徴とされる白色針状物質を含んでいる。

鳩山窯跡群では、詳細な編年作業が行われており（渡辺1988・1990、渡辺1990等）、底部調整と法量を中心とした時間的な変遷が把握されている。ここでは、今日もっとも編年作業が進んでいる須恵器杯を探り上げ、S J3出土須恵器杯の製作技法上の特徴と法量を鳩山編年上に位置づけてまとめたい。

ただし、編年の位置を検討する際には、生産地における状況と消費地である集落における状況との齟齬を避けて通ることはできない。本書では、S J3出土須恵器杯の成形技法上の特徴と法量の在り方を整理し、周辺遺跡の住居跡および窯跡出土資料と比較することで位置づけを考えたい。

なお、S J3出土須恵器のうち、本来的にS J3に

ともなう、もしくは存続期間に近い時期に流入したと考えられるのは、第14図3・6・23・24・25・26の6点である。他に、床面付近で検出した5・7も参考にした。

1. 成形技術の特徴について

まず、成形技術における特徴を整理しておこう。

ここで用いる成形技術は、素地土から焼成前の杯を形作る成形段階に用いる技術・技法を指し、ロクロ上での素地土の荒積み、成形・整形、底部調整とこれにともなう乾燥等のすべてを含む。

S J3出土杯の観察結果を列挙しよう（図版12）。

- (1) 体部と底部の境界付近に粘土の織目が残る製品がある。復元個体には、底部と体部境界付近で割れているものが多い。他部の割れ方に規則性はない。底部のみ、体部のみの個体が多い。
- (2) ロクロによる稜線と交差する粘土の切れ目が認められる。切れ目は左回りに口縁に向かっていて、連続するとは限らず、部分的に切れていたり二重になったり、枝分かれしている箇所がある。かつて、粘土巻き上げ痕とされ、鳩山窯跡群の報告でロクロ挽き上げ痕とされたものに相当する。
- (3) ロクロによる稜線と交差するロクロナデが認められる。ナデは、非常に細かい規則的な凹凸のある纖維質の道具によると考えられる。これが強いほど稜線が観察しにくい。
- (4) ロクロによる稜線は、内底面中央、体部下方に多くこのる。
- (5) 口縁部に水平な粘土の筋が認められる。体部にみられる粘土の切れ目とは異なり、粘土の筋状の膨らみや上から下への「かぶり」である。鳩山窯跡群の報告で口縁折り返し痕とされているものに相当する。
- (6) 底部の切り離しは、全て回転糸切りである。
- (7) 底部調整には回転全面ヘラケズリと回転周辺ヘラケ

ズリがあり、後者が卓越している。また、体部下端が回転ヘラケズリされている個体もある。回転ヘラケズリでは、ヘラをねかせることで得られるミガキの効果を出した個体が多く認められた。ロクロを利用した回転ミガキは、現代でも多く用いられる手技で、ケズリによって生じた傷痕を周囲の素地土を伸ばして埋め、平滑面や光沢を得る方法である。本書では摩耗・風化の痕跡が認められず、正位置に置き接地点以外に及んでいることを条件に、焼成前の調整段階で行ったと考え、回転ヘラミガキとして観察表に表記した。なお、第14図24は体部下半が回転ヘラミガキされている。

(8)底部の形状は内反りが主で、丸底(第14図23・第15図32)と平底(第14図15・第15図28)のほか、「小高台状」で平底のもの(第14図12)がある。

(9)内面体部下端にいわゆる「爪立技法」がある。

(10)体部下端の形状は、底部からすぐに立ち上がるものと、丸みを帯びた腰を張らせてから立ち上がるものの2種がある。

(11)体部の形状は、直線的なもの、内湾するもの、内湾し口縁で外湾するもののおよそ3種がある。

これらの観察結果から、成形技術を考えてみよう。

(4)~(6)・(9)については、特にこの時期を代表する特徴ではないので除外する。(5)については、口縁周囲に粘土のたれが認められる場合、これを観察表に口縁上痕と表記した。皮ナデとしなかったのは、道具を特定することができなかつたためである。

(1)の現象は、底部を構成する粘土塊上に、体部を構成する粘土を継ぎ足して素形としていることを示している。鳩山窯跡群の資料にも、H I期以後継続して認めることができるが、H II期までは、剝離や胎土の継ぎ目の明瞭な例は多くない。H III~IV期に明瞭である。ロクロ盤面上に抱えた素形の問題はあるが、一定の検討が必要となるので、後日機会を得て論じたい。

(2)についても同様で、H II期以前の杯には、認めにくい。粘土の切れ目については、複合痕との関係から渡辺が論じており、挽き上げによって生じた粘土の不

整合とする考えを示している(渡辺他1988)。粘土の切れ目は、表面に傷がある程度で、内面まで通ることなく、該当箇所から割れることがないなど、胎土の継ぎ目とは根本的に異なる。枝分かれや2筋の切れ目が接点をもつことや、渡辺が指摘したように、同一円周上の2箇所に見れることもある。

ロクロ成形による陶磁器を観察すると、こうした特徴をもつ現象が技法として利用されていることに気づく。「練り込み」といわれるものがそれである。「練り込み」は、焼き上がりの色調の異なる2種類の素地土をまだらに練り合わせ、ロクロ挽き成形する手技である。ロクロで挽き上げると、2種類の粘土が螺旋状に巻き上がり、特徴ある色模様を展開する。2種類の粘土の境界線を追えば、それが粘土の切れ目と同じ形状であることがわかる。本書では挽き上げ痕であることを支持したい。

なお、複合痕の中には、素地土の練りに際して折り返された粘土中に入り込んだ気泡が原因で、焼成中に剝離が起こったものもあるようだ。注意が必要である。

(3)については、平安時代にいたるまで継続する仕上げ方法であるが、H III以前の段階では内底面に特に強いナデ痕跡がみえる場合があり、H III期以後はナデの範囲が狭くなったり、圧力が減る傾向がある。

図版12に示したのは、S J 3出土須恵器にみられたロクロ稜線と交差する繊維質工具によるナデ痕である。資料のいくつかには、完全に平滑なナデも認められた。観察表には、仕上ナデと表記し、実測図では消されたロクロ目を中心線に繋がらない線として表記した。ナデの工具には布・皮が有力だが、実見によれば鳩山窯跡群KB 6中には、体部下半のヘラによる回転ナデの資料もある。

(7)・(8)・(10)・(11)は、当該期に属する資料を時期区分する際に問題となる点であり、むしろ様相を複雑にしているといえる。

このうち、(7)については、鳩山窯跡群出土須恵器を観察した結果(註1)、次のような状況が把握できた。H II期を代表するKB 8では底部調整は底部の器厚を

1988) KC 1に一部が重なるが、第1主成分軸上付近から第4象限に分布している。HIII期のKB 6は第2主成分軸に沿った範囲に、これより若干第1主成分側へずれて重なるようにKB 11Aが分布する。その他のHIII期の窯跡資料は、HIV期と同様に、各窯跡の分布の中心が各々小さくまとまり、窯跡毎に異なる法量・形態の杯が作られていたことがわかる。HIII期とHIV期は、IV期の方が窯跡毎に分布の中心がより集中する傾向にあるものの、ほぼ共通の範囲を有しており、今回採り上げた計測値のみでは時期の判定が難しいことを示している。

一方、住居跡出土資料は住居毎にまとまっており、窯跡資料からわかる時期を越えての分布の広がり認められない。これは共伴関係を限定的に捉えた(註4)ため、かならずしも床面出土資料を共時的と判断しなかったことによるのかもしれない(註5)。

ところで、主成分スコア散布図と表2の結果をみると、法量による編年の方向性と限界を知ることができる。HI期とII期、III・IV期については、第1主成分で比較的良好に区別できる。第1主成分は口径と底から上1cmの外径に高い相関をもっており、内底径に有意な相関が認められる。底部付近と体部下端を除くプロポーションでI期、II期、およびIII・IV期のまとまりが大略区別できるといってよい。しかし、分布範囲に重なり合いがあり、個体同士の明確な判断材料とはなりにくい。多数の資料が必要であろう。

第2主成分では各窯跡資料の識別が可能で、第1主成分と併用することでかなり正確な区分ができるといえる。第2主成分は主に器高・内部高と相関しており、深さが重要な要素となっている。表2における器高と内部高の因子負荷量からみて、器高はその他のプロポーション的要素に相関しているが、内部高は独立的であり、全体の成形とは別に、意図的に揃えられた値と考えることができる。

HIV期が第1主成分でやや負によるものの、HIII期とIV期を積極的に区別できる法量上の区分はない。底部調整についても共通なミガキが認められた。底部調

整が異なるKB 1は、散布図上ではHIII・IV期分布域の上部に分布の中心が偏り、他の窯跡資料と重なる部分では分布が薄い。KB 1、これと排水溝が重複するKB 5の操業期間の問題や、KB 1における底部調整技術・プロポーションの系統の問題などを含め、どう考えるかは、本書にその余裕がないので、1995年度の文化財担当者会議以来継続して行われてきた入間郡域における今後の編年作業、および窯跡で行われた遺構間の切り合いと層位の発掘の成果に一旦託し、今後も検討を続けたい。

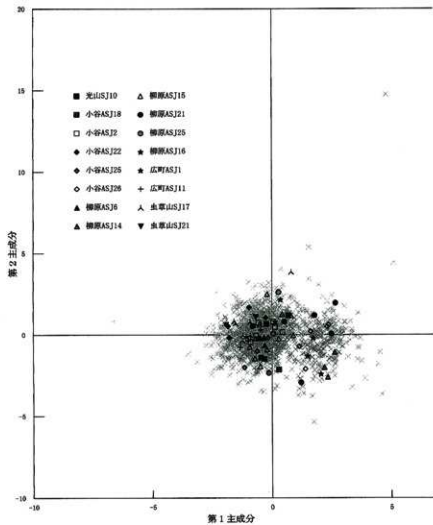
今回の分析では、底部調整における共通性と法量のうち口径・器高中心の流れを整合させることはできなかった。むしろ、口径・器高より全体のプロポーションに特徴が現れていると判断できる材料が多く、内部の深さも器高同様、直接的・独立的に作用していることがわかった。

さて、宮ノ後遺跡S J 3の資料は、HIII期のKB 6、KB 1、HB 6 B、HIV期のHB 4、KC 1の分布範囲に収まっている。KB 1を除き、底部調整の共通する範囲内でもあり、法量も同一の範囲内に分布する。

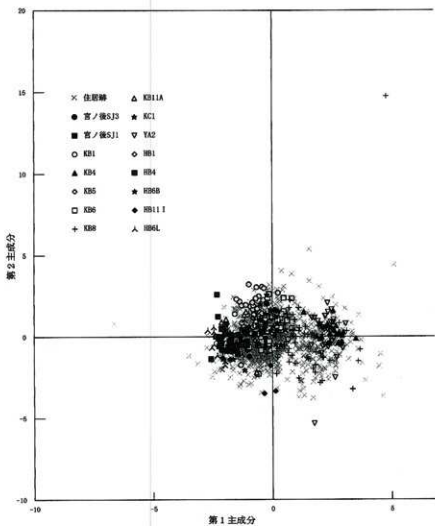
3. まとめ

現在、当該期の須恵器杯編年の基準となっている底部調整と法量について検討してきた。結果をまとめれば、次のようになる。底部は全面・周辺ヘラケズリ、もしくはミガキをかけており、糸切痕を残すものの丁寧な調整を行っている。体部・口縁部の整形と指向としては同様である。6・12は、法量の上でHIV期まで下る可能性はあるが、資料の数量的な問題から、誤差の範囲内であるか、S J 3の存続時期であるか明確にすることは難しい。およそ、HIII～IV期の範疇に入れてよいと考えるが、プロポーション上ではKB 6に類似の資料が多い。

実年代については、武蔵台遺跡23号住居跡の須恵器杯の年代から渡辺(1990)、井上(1994)らによって検討されており、およそ8世紀第3四半期から8世紀第4四半期にかかる時期を想定しておきたい。



住居跡出土伴遺物の分布



須恵器杯の5因子による主成分分析

今回の調査で検出した建物跡のうち、もっとも多くの建替え・拡張が行われたS J 3は、8世紀末までに廃されたことになる。存続年代の幅はわからないが、重複するS J 2の出土遺物からみて、短期間に建替え・拡張が行われたことになる。2回としても上屋の傷みによって建替えたとみるより、異なる要因が生じたと考えるのが自然である。

宮ノ後遺跡を含む遺跡群の調査は、日高市教育委員会によって1998（平成10）年度以降も継続して行われている。今回報告分の調査範囲周辺についても調査されており、蓄積された資料と情報は、追って公にされる予定である。須恵器杯の編年上の問題を含め、集落構造の解明がなされることと思われる。

註

（註1）鳩山町教育委員会 渡辺 一氏のご配慮で、

窯跡出土品を観察させていただいた。

（註2）出土遺物すべてを調べていないので統計的な数値は明らかにできない。

（註3）渡辺 一氏による御教示によれば、椀類底部にもミガキ的な調整がみとめられ、8世紀中頃（Ⅲ期前半にあたる）を上限として出現しているということである。

（註4）共伴を認める条件を、重なり合って出土したものや、カマド・貯蔵穴出土の完形品、竪穴部壁上からの転落品に限ったため、須恵器工人集落とされる窯跡付近の例がほとんどになった。

（註5）今回は住居跡出土資料における伴出関係の吟味が充分でできなかったが、今後詳細な集落遺跡の編年作業が進むにつれ、時期幅の大きい供伴事例が提示される可能性は否定しない。

引用・参考文献

- 浅野晴樹・金子真土・石岡憲雄・梅沢太夫 1982 「埼玉における古代窯業の発達4」『研究紀要』第4号 埼玉県立歴史資料館
- 浅野晴樹・石岡憲雄・梅沢太夫 1981 「埼玉における古代窯業の発達3」『研究紀要』第3号 埼玉県立歴史資料館
- 阿部義平 1971 「ロクロ技術の復元」『考古学研究』第17巻第3号
- 飯田克晴他 1982 「東の上遺跡」所沢市文化財調査報告書 第8集
- 飯田克晴他 1982 「東の上遺跡 第7・8次調査」所沢市文化財調査報告書 第8集
- 飯田克晴他 1996 「東の上遺跡 第12次調査」所沢市埋蔵文化財調査報告書 第7集
- 飯田克晴他 1988 「畦の前遺跡 市立荒幡小学校建設に伴う発掘調査」所沢市文化財調査報告書 第21集
- 井上尚明他 1994 「光山遺跡群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第137集
- 梅沢太夫・高橋一夫・石岡憲雄他 1987 「埼玉の古代窯業調査報告書」埼玉県立歴史資料館
- 大谷 徹他 1991 「宮町遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第96集
- 岡本健一 1993 「谷津・二反田・下向山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第131集
- 加藤泰朗他 1993 「若葉台遺跡」若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅱ
- 加藤泰朗他 1995 「若葉台遺跡」若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅲ
- 加藤泰朗他 1997 「若葉台遺跡」若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅳ
- 加藤泰朗他 1988 「坂戸市遺跡群発掘調査報告書Ⅰ集」
- 加藤泰朗他 1989 「勝呂庵寺 勝呂庵寺F地区（西入間警察署勝呂駐在所）発掘調査報告書」
- 金子真土 1982 「北武蔵の須恵器—7・8世紀の様相について—」『研究紀要』第4号 埼玉県立歴史資料館
- 金子真土・石岡憲雄 1983 「埼玉における古代窯業の発達5」『研究紀要』第5号 埼玉県立歴史資料館
- 小林行雄 1962 「須恵器と陶車」『古代の技術』
- 栗岡 潤・西井幸雄 1995 「西久保・金井上」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第156集
- 埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課・入間地区社会教育協議会文化財保護担当部会
1995 「入間郡における須恵器産地推定について」平成6年度後期市町村文化財担当部会議資料
- 埼玉県立歴史資料館 1989 「埼玉における古代窯業の発達1」『研究紀要』第1号 埼玉県立歴史資料館
- 埼玉県立歴史資料館 1980 「埼玉における古代窯業の発達2」『研究紀要』第2号 埼玉県立歴史資料館
- 斎藤 稔他 1979 「若葉台遺跡群 第一次発掘調査概報 若葉台遺跡C地点」
- 斎藤 稔他 1980 「若葉台遺跡群 第二次発掘調査概報 若葉台遺跡D・E地点」
- 斎藤祐司 1989 「八坂前遺跡 第3次調査」入間市埋蔵文化財調査報告 第9集
- 坂詰秀一他 1984 「入間市八坂前遺跡」八坂前遺跡調査会・入間市教育委員会
- 坂戸市遺跡発掘調査団 1989 「若葉台遺跡」若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅰ
- 鈴木秀雄他 1996 「坂東山・坂東山西・後B」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第166集
- 高橋一夫他 1974 「前内出窯址発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告 第24集
- 高橋一夫・金子直行・植木弘他 1980 「日高町遺跡分布調査報告書」日高町教育委員会
- 竹野俊夫 1988 「小谷C窯跡第1号窯出土土器について」『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山窯跡群発掘調査報告書第1冊
- 田中英司 1995 「横田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第163集
- 田中英司・黒坂植二 1995 「向山・上原・向原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第155集
- 田中広明 1990 「律令時代の身分表象(Ⅰ)」『土曜考古』第15号
- 田中広明 1991 「律令時代の身分表象(Ⅱ)」『土曜考古』第16号
- 田中 信 1988 「川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(VII)」
- 田中 信他 1989 「川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(IX) 龍光第4遺跡・天王第5遺跡・天王第6遺跡」
- 田中 信他 1992 「川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(X) 龍光第5遺跡・花見堂遺跡(第2次調査)・天王遺跡(第7次調査)」

- 田中 琢 1967 「竊竊4畿内」『日本の考古学』歴史時代上
- 田中 琢 1964 「須惠器製作技術の再検討」『考古学研究』第11巻第2号
- 田辺昭三 1981 『須惠器大成』
- 田辺昭三 1984 「古代窯業の成立」『講座・日本技術の社会史』第四巻窯業
- 谷井 彪・今井 宏 1985 「赤沼窯跡第14号支群の発掘」『研究紀要』第7号 埼玉県立歴史資料館
- 鶴ヶ島町教育委員会 1985 「若葉古遺跡群M・N地点発掘調査報告書」
- 富田和大 1992 「稲荷前遺跡（A区）埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書 第120集
- 中平 薫 1989 「若宮—第7次調査—・稲荷・神明」日高市埋蔵文化財調査報告 第14集
- 中平 薫 1990 「稲荷」日高市埋蔵文化財調査報告 第15集
- 中平 薫 1991 「若宮（第10次調査）」日高市埋蔵文化財調査報告 第16集
- 中平 薫 1997 「若宮—25次調査—・常木久保—40区調査—」日高市埋蔵文化財調査報告 第26集
- 中平 薫他 1982 「大寺廃寺—第1次調査—」日高市埋蔵文化財調査報告 第2集
- 中平 薫他 1982 「宿東—後継地」日高市埋蔵文化財調査報告 第3集
- 中平 薫他 1984 「大寺廃寺」日高市埋蔵文化財調査報告 第8集
- 中平 薫 1985 「宮久保・上の糸・大寺」日高市埋蔵文化財調査報告 第9集
- 中平 薫他 1983 「若宮—第3次調査—」日高市埋蔵文化財調査報告 第5集
- 中平 薫他 1986 「宿東—第2次調査—」日高市埋蔵文化財調査報告 第10集
- 中平 薫他 1986 「若宮—第1次調査—堀の内」日高市埋蔵文化財調査報告 第11集
- 中平 薫他 1988 「宮ノ後—第4次調査—・宿東—第5次調査—」日高市埋蔵文化財調査報告 第13集
- 中平 薫他 1993 「向谷・宿方」日高市埋蔵文化財調査報告 第22集
- 中平 薫・大熊季広 1991 「若宮—第7次調査—・東原—第3次調査—」日高市埋蔵文化財調査報告 第17集
- 中平 薫・大熊季広 1993 「新宿—5次調査—・若宮—16・18次調査—」日高市埋蔵文化財調査報告 第21集
- 中平 薫・榎山吉之 1987 「古道・大寺廃寺」日高市埋蔵文化財調査報告 第12集
- 中村 浩 1976 「陶邑I」大坂府文化財調査報告書 第28輯
- 西井幸雄・井上尚明・金子直行 1995 「柳戸・新山・向山・青柳・光山遺跡群」埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書 第154集
- 西川 制他 1981 「脚折遺跡群発掘調査報告書」
- 西川 制他 1983 「若葉古遺跡群C—I地点発掘調査報告書」
- 西川 制他 1984 「若葉古遺跡群A・B・B地点南発掘調査報告書」
- 森野繁春他 1981 「老淵古窯跡群発掘調査報告書」
- 橋口尚武他 1982 「新宿—第1次発掘調査報告—」日高市埋蔵文化財調査報告書 第4集
- 服部敬史・福田健司 1979 「南多摩窯址群出土の須惠器とその編年」『神奈川考古』第6号
- 日高市 1997 『日高市史』原始・古代資料編
- 昼間孝志 1991 「塚の越遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書 第101集
- 松本富雄他 1981 「新明遺跡I」三芳町埋蔵文化財報告11
- 村田健二 1992 「桑原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書 第121集
- 柳戸信吾他 1997 「飯能の遺跡20—加能里遺跡第27次調査・羽塚久保遺跡第24・25次調査」飯能市内遺跡発掘調査報告書13
- 渡辺 一 1990 「南比企窯跡群の須惠器の年代—鳩山窯跡の年代を中心に—」『埼玉考古』第27号
- 渡辺 一他 1988 「鳩山窯跡群I」鳩山窯跡群発掘調査報告書 第1冊
- 渡辺 一他 1990 「鳩山窯跡群II」鳩山窯跡群発掘調査報告書 第2冊
- 渡辺 一他 1991 「鳩山窯跡群III」鳩山窯跡群発掘調査報告書 第3冊
- 渡辺 一他 1992 「鳩山窯跡群IV」鳩山窯跡群発掘調査報告書 第4冊

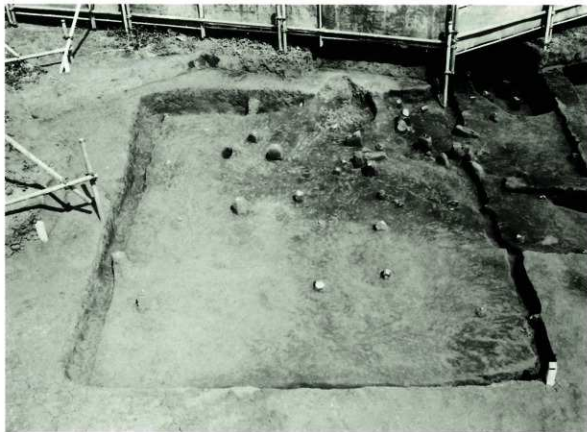
写真图版



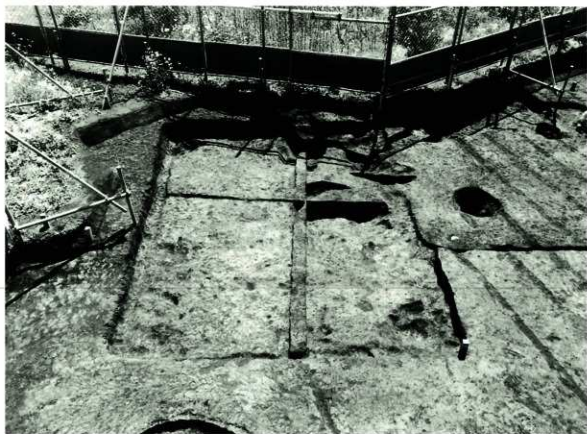
調査範囲全景



住居跡群



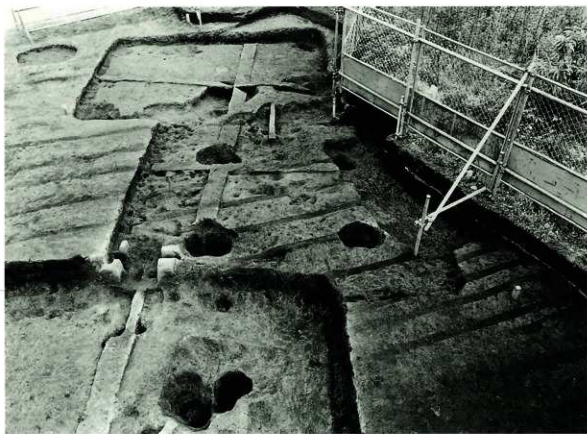
第1号竪穴住居跡



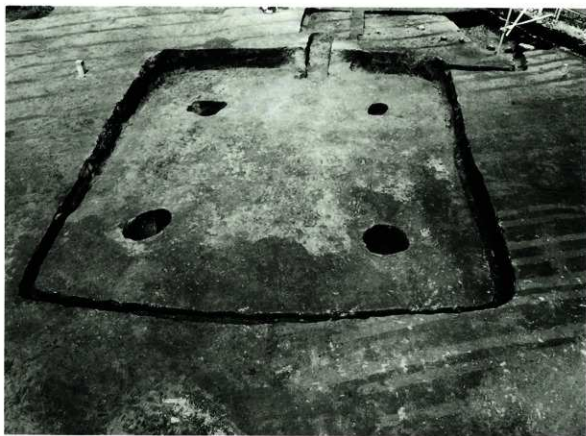
第1号竪穴住居跡掘り方



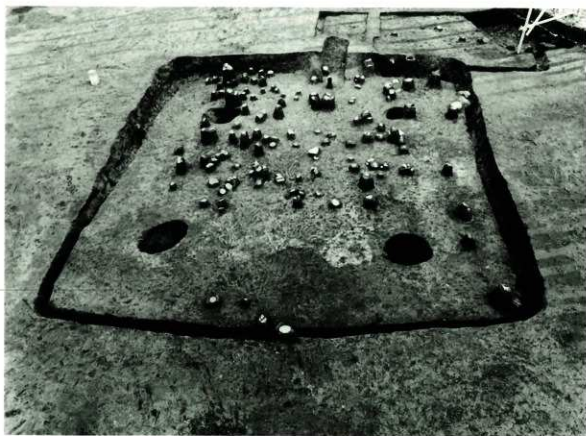
第2号竪穴住居跡



第2号竪穴住居跡撮り方



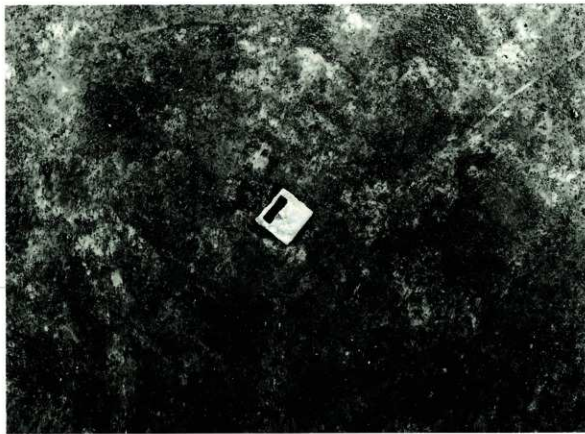
第3号竖穴住居跡



第3号竖穴住居跡遺物出土状況



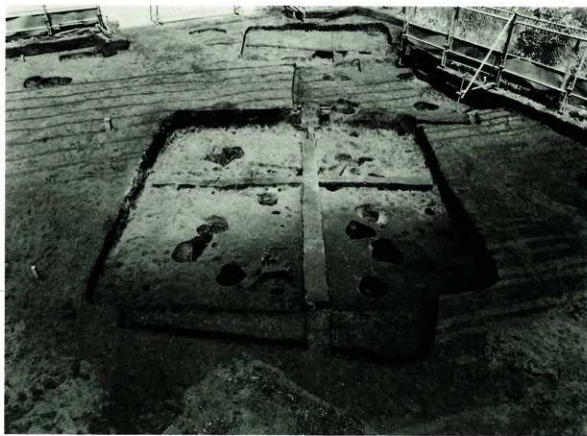
第3号竖穴住居跡遺物出土状況



第3号竖穴住居跡帯金具出土状況



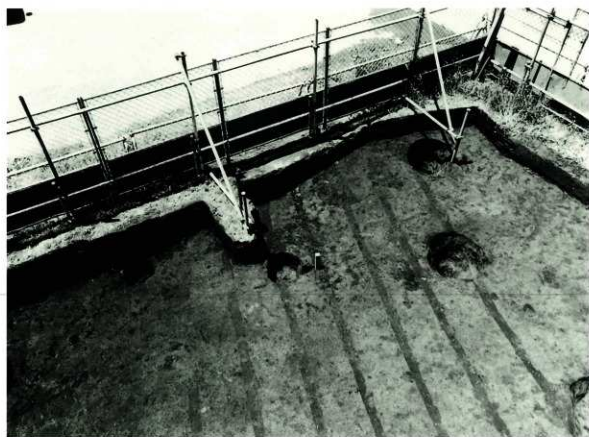
第4号竖穴住居跡



第5号竖穴住居跡



第6号竖穴住居跡



第1号孤立柱建物跡



第1号土壤



第2号土壤



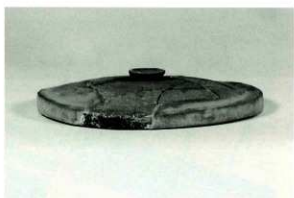
第3号土壤



第7图3



第7图4



第14图1



第14图3



第14图4



第14图 5



第14图 6



第14图 7



第14图 8



第14图 11



第14图 12



第14图 15



第14图 21



第14图23



第14图24



第14图25



第14图26



第15图27



第15图33



第16图69



第16图71



第14图 4



第14图 6



第15图27



第15图58



第15图60



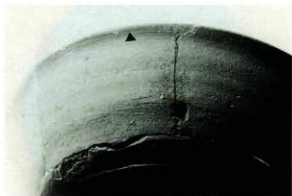
第15图61



第15图62



第15图59



口縁仕上痕と体部下端の胎土継ぎ目 (第14図7)



体部下端の胎土継ぎ目 (第14図6)



口縁仕上痕と挽き上げ痕 (第14図5)



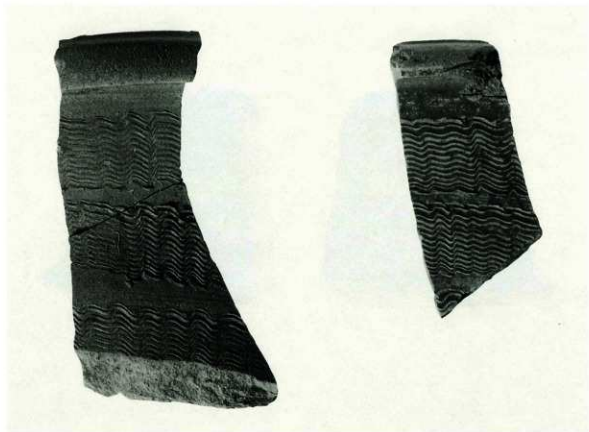
ロクロ稜線と交わるロクロナデ痕 (第14図3)



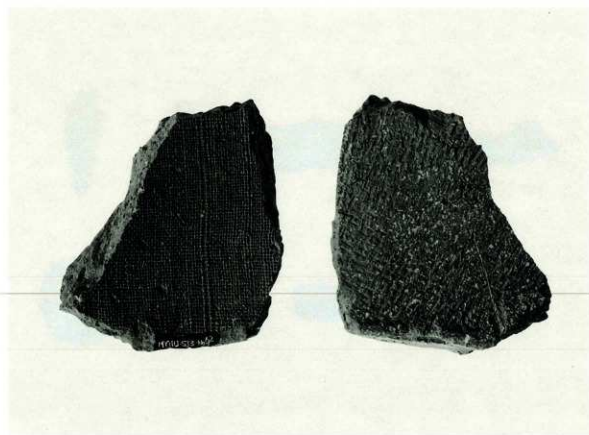
仕上ナデとみられる平滑な面 (第14図5)



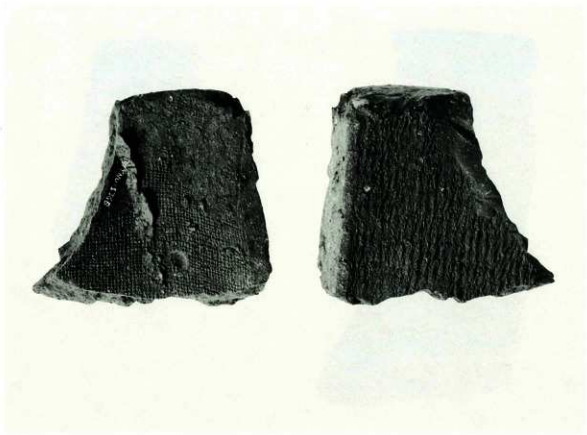
内面のロクロ稜線を消す仕上ナデ (第14図25)



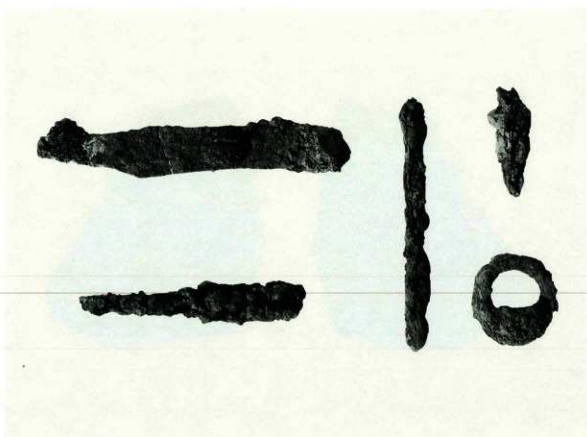
第16图84・85



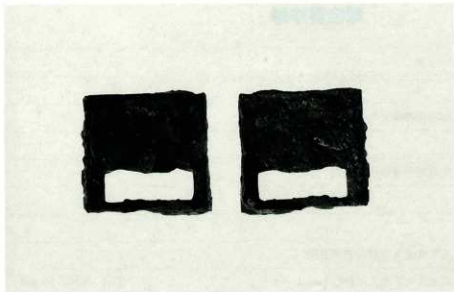
第16图87



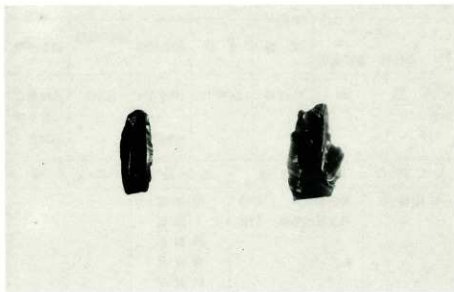
第20圖 8



出土金屬製品類 (第7・17圖)



第17回98



第24回 3・4

報告書抄録

ふりがな	みやのうしろいせき							
書名	宮ノ後遺跡							
副書名	県道飯能寄居線関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第226集							
編著者名	岩田明広							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1					TEL 0493-39-3955		
発行年月日	西暦1998（平成10）年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
みやのうしろいせき 宮ノ後遺跡	さいたまけん さいたまし 埼玉県日高市大字 猿田字橋本128番 地7他	29	104	35°53'19"	139°20'18"	19960401 ～ 19960531	2,000	道路建設 に伴う事 前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
宮ノ後遺跡	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 6軒 掘立柱建物跡 2棟		須恵器 土師器 銅製品 帯金具 鉄製品 刀子			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第226集

日高市

宮ノ後遺跡

県道飯能寄居線関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成10年9月21日 印刷

平成10年9月30日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493 (39) 3955

印刷／朝日印刷工業株式会社